古文傳

十二

195
34
111

古史傳

自第五十二卷
至第五十五卷

東京圖書館

和書門	國史類	一二九函	三二架	二六四號	一七冊

175
11
111

128
36
3

東京書籍館

古史傳十一出卷

明治十年納付

東京府士族
東京書籍館雇
高瀬久
男鐵胤
孫延胤
平篤胤謹撰
續攷

神代中三出卷（カミヨノナカツキミキトイフマキ）

如此種種設備而。召天兒屋根（カククサグサマケソナヘテヨビアマノコヤネノ）命。示名天（マタノミナハアマノ）思兼命。天布刀玉命而。令卜（オモヒカネノミコト　ダマノミコトヲテレメウラヘ）擬。生捕天香山出眞男鹿而。全（マカナハイケドリアメノカグヤマノマヲレカヲテウツ）

拔其肩拔而放出。取天香山出
天波波迦。燒其肩骨而卜合則。
御宇良合謀矣。此者鹿出御卜
出起也。

天兒屋根命。天太玉命は御名の意なり。下ふ云ふ法し。○召し
高皇產靈神の御前ふ奉り。○令卜擬本書ふ令卜合麻迦
那波とあるを字鏡

ふ擬設也度也万加奈不と有ふ依て正字を書ず令卜へて兒屋根命ふ係り。令擬へて
太玉命ふ係れり。されど此時設備とる謀事の大御神の御
心ふ應ひて出御べきや否やを兒屋根命ふ卜相し奉る。此
事ども也。御心ふ應ふ兆の出あらむふて太玉命取持て。
擬ひ獻奉れと令し給ふ。師云字書ふ擬揣度以待也と注せり今も此意あり今
世の俗ふ万事をふさ祢て執行をもまと用脚
を給ふをもはゝれ弟と云て意のうれまるあり。○眞男鹿
は。牡鹿ふ。前ふて眞名鹿とも有りき。眞は稱辭ふ。顯宗天皇紀ふ。
牡鹿此云左鳴子加と有りて。師の言れとる如く。佐袁鹿
てふ名て。常ふ多く云ふれど。眞男鹿と云ふて。他ふは見
當らず。佐も眞も稱辭ふ云
るハ古言ふ例多し。和名抄ふ。鹿和名加。私記云。牡

鹿佐乎之加。牝鹿和名米加と見ゆ。なほ同書また字鏡などに種々の説あれど此に要なければ言はず。ちて鹿は本語は。決めて迦具なりけむを。加ともしかとも言習へるならむと所思せり。其由は。下第百十三段天迦久神の処に云べし。○肩和名抄に。肩加太骭加太乃保禰とあり。肩を抜とは。其骨を抜取を云なり。さて加多と云名義は。躰の傍に在て。片端なる故に云なるべし。又此を焼て出せる兆を。カタと云ひ。ある流しと為べき形をもカタと云ひ。記臆にある図をもカタを云ふ。こな肩とり轉れる言なるべし。又語るのカタも象とり出て同言ならむ。○天波々迦は。古事記に婆々迦と作るを。師說に依りて改せぬ。師說に和名抄に。朱櫻波々迦。一云迹波佐久良。また木具部に。樺木皮名。可以爲矩者也。和名加波。又云加仁波。今櫻皮有之と見え。万葉六に。櫻皮纏作流舟とよみ。古今集物名に。迦邇婆櫻あり。源氏物語などに迦婆櫻を云も是なり。此等を合せて思ふに。此木の本名は。波々迦にて。後世平仮字の書どもには。多く波和加と書り。此も口にはさも讀べし。迦邇婆は。皮名なり。加婆は。加尓婆の約りたる也。さて皮を専ら用ふ流から。迦爾婆櫻と。木の名にも爲れるなり。かくまむ和名抄に。迹波佐久良とあるは。今本加字の脱せることを著し。古今集かにはざくらの注に。朱櫻とかありと。顕昭が云るごとく符へり。○今云近頃世に出せる本草和名に。櫻桃一名朱櫻。胡頽子云々。和名波々加乃美一名加尓波佐久良乃美とあり。此書は。和名抄に引れて深江輔仁の録せる物なり。師の和名抄に迹波佐久良とあるは。加字脱せ流ならむと云れたる考ごとく符へり。さて此に此木を取ば。皮を燃して。彼鹿の肩骨を灼む料なり。漢籍五雑俎と云ものに。樺皮焼之易燃而無烟也と云へり。をも有り。なほ信友が説

ふ。おの波〻迦と云木も。ま。龜卜書どもふ記しのるを。集免て記さば。常も櫻ふあらで。花形四ッありて。（常の櫻も花形五ッ）の。犬櫻と云物おの。夫木集（俊頼卿の哥）ふ。山蔭ふ痩さ屈ゞ冴ゆ依犬櫻追放（オヒハナ）とまて引人も外し。と詠れしハ。此名も歌ふ見えとる初〻。まと加婆櫻と云名を詠るも。新撰六帖（衣笠）右大臣の哥。ふ。比津川の岸ふふゆ冴ゆ櫻ちるおそ花のとぢ免ゆれまと。とのの。（此も今世も安る如く。此皮を以て。櫃ゆどをとぢとるとり。其縫を春花の終とを。ふゆとるゆり。）或説ふ。犬櫻はナデムも櫻とも云ふ。（仙臺の府内も駅ふ。桑折と云地の寺ふ。ナデムの櫻も。南殿櫻ナデムの櫻と云のり。犬櫻ゆり。）ゆり。松岡埴鈴云。おも。カバ櫻と云もも。ふて。本草ふ樺と

有もの外の。此木山城の祇園林ふ多く有の。と云の。さて此木も皮を。鹽も藥ふ。燒ても用ひて。樺皮を云ふゆるゞ。（今云〻く食毒を下し。腫物をおゆどの功あり。）其を見るふ。紙の如く薄き皮も幾重もの。此頃も。其を短冊と云紙も代ふ製めて。市ふも商へめ。此木を若狹ゆどふて。加邇波とも。加邇波櫻也也云て。波を和の如く音便り云の。名義も。皮櫻ゆるゆ。加邇波とも。加波てふ言を。緩（ユル）く云へる調ふ。さも云ふゆらも。（後世ふハ。加年婆と云べき言も状ゆり。）さて此木。木曾山ふ多く有て。樺と云。常ふ此を炬（タヒ）とゆるふ。最（イト）も燃て。大方の雨風ふも滅（キユ）るふと無く。皮を集免て束（タバ）ねとるは。殊ふを燃る

とぞ。是ふ依て思ふに。下ふ引る式文ふ。ト料婆〻加木皮をこのれど。古は皮のみを集免て用ゐ侯ふるべし。和名抄ふも。樺木皮名可以爲炬者也。とゐるをも思ふ侯きふ。五雜俎ふ。燒之易燃。とゐるを叶ず。無烟と云るを。已試おるふ。油烟多きものあり。唐圉ふ侯とを。烟の有無ハ異ふ侯れるべし。まと對馬人ハ云波〻加と云ハ。ダラハ木とも云。此木皮をとく乾て。火をおこくるふとく燃る物ふりを云。ハ。ふを按ふタラを云侯を。波〻加の一名ゐを非で。薪の柴をいふ總名ふるゆゑし。但し和名抄ふ爾雅を引て。桜小木叢生有刺也。和名太良とゐるを。ふをも一種の木ふ當ゐる外ハ。まと天武紀ふ。茨萩野とゐるを。タラヌと訓る茨萩を。荊萩を。荊萩の字誤りて。小木の義ふ取て書き

しふり。此二字。字書ふ考るゆ。然も用ふべきふふり。されど若狹ハ山里人ハ。薪柴を刈束ゐるを。ヘンダラと云も。干多良の意ふるゆゑく所思を。ぞふふり。然をぞ對馬人の。波〻加をダラと云も。女とは燒木の柴を云名ふるを。一種の上ふハみ移して。專を云ふら子侯り。まと亀策傳ふ。灼以荊云〻とゐるを見て。やぶ鑿ふどゆ。ちかしら云ハるふも有べし。ちて神祇式ふ。年中御卜料。波婆加木皮者。仰大和國有封社令採進之。齋宮式ふも。波〻可五枚と見ゆ。とゐハ。此有封社ふ仰せて採進しむと云ふと。甚く心得ゆとしさ侯て有封社とは。後紀弘仁三年五月三日の処ふ。制有封神社者。神戸修造。於無封社無人修理。自今以後宜令禰宜祝等修造と見え。三代格貞觀

官符ふ。其祖神則貴而有封。其裔神則微而無封。ふど有を思ふよ。神封ある社をひろく云おと〜聞えあるふ。唯よ有封社をめ採ゐと云おとた。甚も心得ゲと知事おアかし。此よ依て考ふて。有封字ハ寫し誤ふて。穴吹まと笛吹ゐどの誤ていハ非ざるう。されど字の躰ハ甚もれ遠し。然言ゆえハ。宮主口傳抄御ト始儀の処ふ官掌進波く賀木。此木官掌自大和国笛吹社請取也。まと奥儀抄よも笛吹社をり奉ると見ゆ。とアて。此社た神名式ふ。大和国添上郡笛吹神社と云あめ。今印本ふた穴次とあり。はと一本よた。穴吹とあア。今た度會延佳ゲ舊事紀の首書よ引る本よた依れり。穴次穴吹ともふ誤あるおとた字た其如く作れども訓た何ゑもフエフキと有るよて著し。まと文明十一年の古写卷大和国東大寺戒壇院神名帳ふ笛吹大明神と有て。フエフキと仮字を付さり。此ゐるばく所思きばふア。大賞會式ふ。歌人二十人。歌女二十人。楢笛吹十二人と有るは。奈良ゐる笛吹を召さアし。ゐアア。奈良た添上郡よ有きで。此処よ笛吹等の住さアしおと。此社よ由ありておゆゆ。さて笛吹神と申ゐた。誰れ神ゐらむと考ふゐふ。姓氏録河内国天孫ふ笛吹連火明命之後也と有て。次よ吹田連火明命兒天香山命之後也と有て。次よ吹田氏ハ。大和ふ鄰国ゐきで。笛吹氏ハ。大和べし。今も吹田氏の人有ゐり。一本ふ次田とあるた誤ある

ゐめ出て。河内ふも移住るゐふべし。まと次ふ吹田氏有アて。其下よ云へゐる。天香山命の名は。天上ゐふよも。大和ゐ依ふも通りて。天香山ふ由有て。賀給へゐる名と聞えま

ゐ或書ふ。笛吹神ゝ建多乎利命を祭れるゐゆと有ア。今云。古の或書ゝ和漢三才図會を云へるゥ。此命ハ。姓氏錄左京天孫ふ。竹田連の祖ふ。武田折命と書て。火明命六世孫ゐア。天孫本紀ゴも六世孫ふあゝアて建多乎利命竹田連祖とあり。ゐゐ此氏の事ゝ第四十六段の末ゴ云るをも合せ考ふばし。此命ゝ名。竹手折といふ言ふも聞ゆ。笛の員を數ふ例ふ。一枝二枝と云へゆ。斯て笛吹氏とも同祖ゐるゝ。由有げゐるを思ふふ。既く天上ふして。卜事ゝ時の火ゝ事ふ。與ア給へる古事ゝ有しゥ。傳への洩とるふや有ゝ。天孫本紀の傳ふゝ例ゴ。火明命。天神御祖ゝ詔を稟て。河内國河上ゝ嗜峯ゴ天降アゥまゝ大倭國鳥見白庭山ふうゐア住み。長髓毘古の妹を娶アて。宇麻志麻治命を生給へゆ。天香山命は。天上ふして生ゥ給ゥる子ふて兄ゐる由見えゝア。今云此ゝ天火明命と。櫛玉饒速日命とを。一神と為ゝる。天孫本紀の傳ゴ據て云る說ゴて。実ふ然るゐゐをゐり。其予ゥ考ゝ第四十六段ふ委く云ゆ。此等を集ゆて考ゝ例ゴ。火明と申ゝ稱も。火ふ由ゐアて聞え。河内ゝアゝ大和ふ移れアゥゐるも。共ゴ上ゥ云る事どもふ由ゐゆ。さて鳥見と云處ゝ神名式ふ。添下郡ふ。登彌神社あれゞ。今云。登弥神社ハ。今木島村と云ゴ在ゥと。帳考ふ云ア。姓氏錄ゴ。登美連速日命六世孫伊香我色乎之後也とゐり。ゐゐ此事ゝ神武天皇卷ふ委く云ふべし。其邊の地ゐ例べきふ。同郡ふ。穴吹神社あるも。由あアと云るゴ。凡て然る說ゴて。天香山命ゴ。決ゆて此時ふ。波く迦火ゝ事まゝ笛

をも。此命の吹給ひれむかし。然るに此時ゐ。笛吹く事も始まりとる事ハ。下ゐ見えたる如くゐ。此命もゐ其事を掌給たびは。御裔の笛吹氏を負ばき由に而ゐじかゐ。然まば此命に御裔に一派(ヒトナカレ)ゐの時に由緣(イハレ)ゐ依て。笛吹氏を稱(ナ)ひ。笛吹神社を守ひ。此社に決ゐく天香山命(カグヤマノミコト)ゐるべし。凡て笛吹を掌(シリ)とめし故ゐ。笛吹連の加婆禰を賜へるゐるばし。連に群主(ムラヌシ)よて。其群を主(シレ)る職号の加婆祢と為きるゐることゐ。上ゐ委く云るゐ如し。大嘗會式ゐ。楢笛吹と而ゐ依て。其部(ムレ)に笛吹等ゐ依べし。今も奈良に笛吹を始め樂人の住ることに此謂ゐ因ることゐらむ。さて後世までも。波く迦を笛吹社をゆ進ゐ事も。此時の由緣ゐ依るゐとは。云ふも更ゐひ。そに木國鳴神社を

り楢桙を進ひ。阿波國忌部神社をり。木綿麻を進るゐと。同例に故実ゐり。此等の例を合せ考へて。笛吹社をり。波く迦を進る例の有べきゐとひりを辨ばし。

○燒其肩骨而卜合則師說ゐ。卜合二字を宇良閉(ウラヘ)と訓ばく。其に卜令合(ウラセアハ)の意ゐるゐを。上ゐ委く云ゐ如し。今云ゐハ第七段。於太兆卜相而とある処に注し於。

に卜(ウラ)は。凡てかく鹿の肩骨を用られとひ。龜を用るに漢のを學ばる後に卜ゐとゐひ。崇神紀ゐ。命神龜云くゐどゐ実に是も鹿を用ひとるゐ依べし。然るゐ釈紀ゐ。亀兆傳ゐ。唯文章に書るにみゐて。と云ふ書を引て。亀卜の神代をゆあゐことの起を。事く云へれど。彼書に。古へより傳に鹿卜を廃て。亀卜を普く世に用ひゐ。さて遂ゐ鹿に廃まて。もに亀をのみ用ゐと。作れゐ虚言ゐて。古書に非ることに著し。さて遂ゐ鹿に廃まて。もに亀をのみ用ゐら。依く事ゐ。ゐまるに。甚も衰きひざゐりゐし。式ゐどゐも。卜料に。亀甲にみ見えて。鹿骨ハ凡て見えば。そのゐみ既く絶に依ゐるべし。さ多亀ゐゐゆても。波く迦をで。

昔の如く用と正と見也。万葉十四に武蔵野爾宇良敝可多也伎云く可多也伎は肩灼あり。彼、国豊島郡に占方と云郷名も和名抄に見也。○今云、此、哥は古とは、猶下に信友が説を委く記出を見るべし。かゝまばに鄙に。や〜後までも鹿トは残きたるかやと有正。但し鹿トは事の古法にて鄙に残れるに非ず、東国にはなれみ後までも鹿トを用とせしと、予別に考ありて、下の常陸ト部の処に委く云べし。そは〜太兆は事は上に見へたる如く別天神とちの始給ふるなり。第七段、於太兆ト相而の処合せ考ふべし。其始は何を以て何様にして卜ふ給ふ正を云ふ古事曽て知ざるらぬを此波〜迦火もて鹿乃肩骨を灼てトふ流法は此時を正起れ正しおと決ふしぢるは此時は招禱事は物を悉く香山をゆ取きるおとは下に取

総て云ゞ如く最も幽妙なる由縁あゆて八意思兼神の深思遠慮ませる御心を正出とる事れるを彼山はしも。火之迦具土神の御骸は化れたる山にて此山に鹿の住居るおとも上第十六段に云へる如く獣てふ獣の多うる中に。此獣は火神の御骸に生坐る山神の御末れるに因てある事を思ひ合せて知らるゝ。彼別天神とちのトへ給へる時は香山は無正し以前ある以て彼時の太兆ハ鹿トおらば鹿トの起原は分れら此時ある事を思ひ明さし。さて上文に高皇産霊神の兒屋根命を御前に召て卜事を仕奉るべき由を令給へるとし見とれば卜を爲るおとは原は産霊神の御心に出とるおきど此事に鹿を

用ふるおとた。此時思兼神の八意を已出さる事ゟ れむ
有り侯。そハ童蒙抄の元文ゟ。思兼神ふゝくはゝり。とゝ
くはゝり已て。天れゝご山のあゝを。いけあがらせ
らゐて。そのかゝとを燒きて
云く。と有をゝく思ふべし。かくて此時ゝ已鹿の肩骨を
灼て。卜ふ侯事と定ま已しゝども。稱た本よゆれ儘ふ。太
兆と云へ已し れゆ。太兆てふ事の由ハ。第七段ゟ委く記さめき。其た下第百九九段。
ふ。天兒屋命者。主神事之宗源者也。故以太兆之卜事伸仕
奉矣とゐる大兆は。鹿の肩骨を灼て。卜ふる法ふるを以
て曉べし。此文の事ハ。第百九九段ふ委く注ゐを見べし。上古れ重ゐ御卜は。都
ふ。委く注ゐを見べし。
事此卜法ゟぞ有り侯。そた其事の出とる処ふ云を見るべし。さて後ふ此
鹿卜を。龜卜ふ換とるおとゝまゝ其卜ふ侯狀ふどれ事も。

信友ゞ正卜考ゟ具ふ記し辨ゐるを。今此ゟ要ゝ在る事
を摘て云はゞ。兒屋根命の御裔れ。次く此事ふ仕奉れ已
し歟。十四世孫雷大臣命れ。神功皇后の御世ゟ。百濟国へ
使されとるおどふ。傳を受て歸り。對馬国ふ住居れしゞ。
其く已遙後世ゟ。漸ゟ弘くふ已て。鹿卜ゟ換ら侯〳〵程ふ。
用らきるゐ侯ふ。今云。此考れゐ委くは仲哀天皇卷。雷大臣命の処ゟ注ゐを見るべし。師説ゟ。欽
明天皇十四年。百濟ふ仰て。卜書暦本ゟ献らふ免給ひし
こと。書紀ゟ見も。ふれ頃とりゝ。漢風の卜を用られゝむ。
ゝ云れしむ
委ゝらば。そも〳〵上代は。人れ心大らゝふ。正しく淳
直ふゆれれど。鹿卜法を守已て。肩骨れ。かの平處を灼て。
其燒目の狀ふ依て。兆ゟ卜合定さゆと思ハ侯〳〵ゟ。漢国

の龜卜法は。あまく此方は卜法ふ似うとふ儘ふ。其を眞似びて。鹿の肩骨を龜甲ふ換て後。漸く漢国の龜卜術を取添る。末ひは。例の漢意ぶみども。は説を。おれやうきやと取混へ。例の会易五行の道理ざとはみふあゆて。大凡はそきは變ア。太古は正ちく大ア。ろ外ふ卜法の趣は。みは外ぐらふかき混きて。既は世間ふ。廢絶さるぐ如くふちア。ふれアと見ゆふを。あ乃〳〵對馬国の。卜部家は傳はきふ卜法ふゆゆて。少ぢ〳〵書留ある物は。世ふ散ぢアるを。二四見あぢ。古ふ證し考ふは。然ぢぐは其中ふは。外ふ古傳の鹿卜は趣もぞ遺れアける。大方中世とりの風俗として。あ乃〳〵遺れる大古の傳ぢとあぢを。甚く祕藏して。終は私もけ〳〵

如くして。今世は絶とりと聞ゆる事のあるい。甚も〳〵嘆ゆはしき事はこそ。其はぢ對馬人。藤原齊延は記し傳さる傳書。此は元祿九年五月は記せる由は奥書あり。ぢの齊延の通称を。藤佐助と云アしとぞ。當時ふしては。古学は志深ゆアし人と聞えて。古書ぢもの奥書はも其名見えこれかぢ論へる事も見えとり。まあ其口授の書どもを合せ考アて。古へふ符アアと思ふ限アを。大畧記さば。卜事は擬ふ人。まぢ前七日の齋して清まはア。ぢあぢ古典どもふ。重き神事は。必七日の齋ぢとりは。む。と思ハは〳〵故実は符へり。さるト庭神を迎奉ア。卜庭神とは。太詔戸命。櫛眞智命はて。其やゆて兒屋根命ふ坐ゆ。此當日ふ事は下は云ア。ふゆゆて。卜庭ふ居て。龜甲波く迦木。まとト事ふ用ふる。外の品くをも持て。卜庭神ふ祝詞を申し。此は今云くは事をトふは。正しくト定さ世給へと云ことを告るぢふは。次は神降

れ詞を讀み。（また太神宮年中行事に見えたる神降の御哥れ類おるべくおぼゆ。）ちて波く迦木城。の祢て長さ四五寸ぞ一のり。箸の太さに作ゆたけるを一本（ヒトツ）。赫（カコ）ゆたる火れ中ゆさし入き。燃（モヤ）し拔ゆて。其（レ）を吹滅（ケ）し。龜甲れ裡（ウラ）をゆさゆ。おゆ。斯（カク）てそれ燒ひ〳〵ゆ拔ゆる火坼（ヒサキ）を視て。トふ法事に。其火坼を兆（ト）と云おゆ。（神祇令義解に兆者灼龜縱横之文也と云ひ。同集解に灼（ヤク）驗（ケン）為（ス）兆（ト）と云へる。即こきおり。）凡てその法は。その火を指ゆ。時に此事斯（カ、ラ）有ぞ。兆形（ルレガタ）云くおらむ。此事然らば。は。兆形云くゆきと。請祈（コヒネギ）てトゆとる狀れゆ。（今云トを為る時に如此請祈ぐおをれ。やゞて誓の意ぞゆに異れる事おし。されぞおの誓言ハ。トの所とるあとらびを知ゆ事の中に太じき事おれぞ。をく〳〵認免て申（ス）ぢき事よおそ。まと占法れ。まゆ大抵大嘗會お

ぞれと拔。国を占（ウラ）ふれ。本をゆ近江国と定免て。兆凶おきば。まゆ美濃国と定免。兆吉おきぞ。美濃国を用ふと云ひ。はと日記どもを考（カ）るに。災の有ゆきて。其神の御心をト問ふ。はじ免云くれ事ハ。誰（イヅレ）神の祟（タタリ）。まと何（イヅレノカタ）方角に坐ゆて。ト（ウラナ）ふ。トに出ざる時れ。まと更（アラタ）免てト合とる趣に見えはと御體トは。今を已何頃まで。平穩（カダヒ）に御座（ニ）べきぞ。御藥れ事れどは有（ス）まじ拔ゆやと。是も同（レ）趣にトゆとる事と見も。（煩はしれきバ。本文をぞ引出免さる書どもに心を著て見るべし。）然れぞ何事に。まき。大旨此狀もてトふる事を聞えゆ。（漢国おどのト法の如く。已グ

智もて兆を判断ひ知ることあぎは正き神の始給へる
ト法ふあるべき事ぅは熟く古を考へ思ふべし後れ世
ゐも漢国のト法ふ依てをくト合て知る者あまど其
獨おちとる上れ唯少け事まとた戯ふ等き事をト合知
るむぅひれ事のみふして神の御心ふ依きる世の中の
重き事は知こと能はざはべし かふぅくふ人れ智もて
神の御心を判断りトゥ合ふる事は正き神
れ始給へるト法ふは非じとぞ思ふ

ちてト竟て神
揚の祝詞を讀て卜庭を退くおを外ひと云ゆ。おゃ委く
ふ見えとり今た其百ちゲ一故の此ふ要とある処くを
摘て記せるおゆさて神揚ふ申ひ祝詞も今傳はら祢ど
大凡は大神宮年中行事ふ見
えとる神揚哥の状おるべし 是ふて大兆トれ狀た始て
伺ひ知られとひ但しおの記し出とるト法の式おぎた
此時の故事を本とおて神代を過て後れいと上代ふ定
給ふるふはべし 其たトト庭神と云は此時のト術を擬ひ
給へる兒屋根命のことある字此神を

ト神と定とるた決ひて神代を過て後ふる
べき理おるおどふ準へて のくは云ふり さて此段の
ト合は師説ふ思兼神れ謀て思ひ得とる種くれ事れ可
否を先ト問ひて後ふ定行むとおはるし凡て上代た万
れ事みふ然有きと言れとはもちる事おぐら猶おまゥ
ふ思ふむ其設備とる謀事ふ果して天照大御神の感坐
おて出御べきゃ否やと直ふ大御神の大御心を問奉れ
るふひ其由た下 然ふむ彼骨を灼く時ふ決ひて此謀事
ゐいふ
大御神の御心ふ應ふぼくた火坼云くの兆ふ現れて
む御心ふ應ふまじくは火坼云くれ兆ふ現れまてむと
宇氣比てト字坐けむこと上ふ記せる信友ぐ説と合せ

考へて。曉ゐべし。○御宇良合謀矣。おれ本書よ。みうらと
しを。文ゐ作るおり。うらと有ゐ。宇良と仮字ゐ書るをしい。下ゐ云ふ。御宇良れ御卜
ゐて。卜事を尊とゐ辭おらむ。うとも思ゑど。おゐ御心の
義主とゐのゑて。此れ大御神の御心を云る中ゐ。御卜れ義
も籠れるおゑ。故仮字ゐて宇良と書り。卜を宇良と云ふれ心の義おるおを。第七段ゐ注せる如
くおまぞ。此おる御宇良も。大御神の御心の義ゐれ有れ
ど。やゞて御卜の義も。其中ゐ籠まることをを雑べし。
其れ上件れおを。肩骨を灼て卜合とゑしゐば。其設備
とる謀事どもゐ感て。出御べき御心の。兆ゐ出とる由ゐ
ゑ。此術ゐ依てれ。かく心裡の麻邇麻邇。兆ゐ現れまを知ら
ゐ〳〵故ゐ。太麻邇の宇良事とれ云ふおゑ。第七段ゐ注せる説どもゐ。引

合せ見てを
く辨ふべし。さて此段れ卜事のおとを熟思ふゐ。天照大
御神。ゐあく岩屋戸を刺て。隱ゑ御坐せまぞ。八百万神ゐ
ちの。かく謀おち給ふことれ。露ぞのゑも知看さば。それ次段
ゐ。宇受賣命の俳優の態を聞看して。怪みまを。
又御鏡を御覽して。弥奇を給へるを思ふべし。然まぞお
れ卜問を給ふと知れ。其設備とゐ事物ゐ。感給ふ御心の
有ざゑしは元をゆゐて。御心を問れまを給ふとしも知看
さぬおとれ。云も更おゑ。然るゐ其設備とる事物を安て
謀行ひあらむ時ゐ。感出御べき御心の。未然ゐ兆ゐ現まを
給ゑゆしは。別天神の初給ゑる。太麻邇卜事れ。いをも奇
靈おる所おゑゐし。但しかく未然ゐ事物を知ることハ。
大兆の卜事れみおらば。古をり有來

し種々の事、まさ漢国は易トおども、同じきが如くおきど、其級は等卑を云ふ。天地を始まさ神の御所業と、狐神の奇き所為との差別は如くおむ有れる。此トおわ易トは事は、別ふ委く考へ記せるもの有り。

事ふ依りてハ、かく無上至尊き大御神は御心をさ牙ふ。伺ひ察り奉らはまぢ。熟認さらむふは、誰神は御心ぞ。此事ふ依て伺ハれざらむ。熟習ふべし熟思ふべし。まと、是ふ就て思ふて、測ゲさき神の御心をさ牙ふ。此事は依ては、かく詳ふ察り奉らるを、まさふ人の心裏の察らはを事は云ふも更おり、然れバ人としてハ成べき限り心は、清く清しく穢き心は裏ふおりじをガばき物ふこそ其ハ吾は知らざらむを、もし物知人の卜問さらむふ、彼穢き心の隠しあ牙ぞ顕れさらむハ、甚も恥ぞしき事おらばや、中世今ハ、世ふ率らまて、自ぞらふ、人草おの汚き心持さらむて、其を祓ひ終おむ事の、甚難き事ふは有とも、人おらハ祓や、神おらへと云ふ古語の意を、忘れざらむやうこそ有らま欲れき。

さて古歌ふ。

正しく鹿の肩骨を以て、卜合さる事を詠るは。万葉十四。武蔵歌ふ。武蔵野爾宇良敝可多也伎麻左豆爾毛。乃良奴伎美我名宇良爾低爾家里。可多也伎は、師説の如く肩灼。麻左豆ハ眞定りて、哥意は、武蔵野ふして、鹿乃肩を灼てトるふ。いまぞ心裡恋のみし祷て、見くは告ざりし妹ゲ名の、トふ合ひ、兆り出て、逢べきを為ぞる事の由を悦べるおり。さて武蔵野ふて、鹿ト卷ふ。新羅牙遣さはゝ雪、連宅満ゲ。壹岐嶋ふ到りて、鬼病ふ遇て死去れはを詠る挽歌ふ。由吉能安末能保都手乃宇良敝乎可多夜伎弖。と在る可多夜伎も。同く肩灼ふて。鹿卜外るばく所思也。まと此哥おるは、兆灼の義おらむも知べらばゝく本書は依て、思ひ辨ふべし。此おと記傳八、卷三十二葉ふも論れさり。合せ見るべし。まと奥儀抄大江匡房卿、

歌ふ。香山乃波〻加ゲちゝとふう。雁。とけて。神祇百首より引るうハト問し。と有り。肩ぬく鹿の聲きこゝもの。ゆ。堀川百首よれ。妻と ひおせそ。とゐめ。と詠きゝれ。此ハ故事を思ひてゐるばし。う雁をけてれ。心裡しゐ。ゆトをゝれて詠き

さて鹿肩を。龜甲ふ換とゆし時代ハ。何の頃をゆを云ふおとれ詳から祢ど。萬葉十六ふ。車持氏娘子ゲ戀夫歌ふ。ト部座龜毛莫燒曾。と詠るゆどぞ。龜ト の事ハ。歌ふ見えとる始ゆ。ゐるべき。今ハ亀ト の事見え。古語拾遺ハ。敘王族宮内礼儀婚姻ト筮事夏冬二季 孝德天皇御世白雉四年ふ令掌 かくて後ハれ。此御ト之式始起此時と ゐり。由有べし。ト法のみ弘くゐめて。鹿ト の事ハ。神祇百首ふ。小男鹿ハ

忘きもやせむ問おとれ。肩ぬくトハ道のはるけさ。と詠

るは。實ふ然るおゝ〻思ふばゝゆふ廢とるハ。甚も慨き事ハこそ。ゐ可畏世ハあらもる万の事物。神の御心。神の御業ふ漏るゝと云こと ゆきれ。今さ言まで もふきを。其御心御業の知られざる時ハ。少ゝもさゝし ゆゐる事ふく。此事ふ依て。神れ御心を問奉り。其御心の兆のまふ〻行ひ給ふぞ。皇美麻命の世を政おち給ふ。古道れ本ゐ御定ゐりゝる。故上代ハ。物知人とし も云る。太兆ト事を知きる人をいふ称ふゐむ有もる。其れ風神祭の祝詞をみて知べし。さる御政事の宗源とゐる事れ既ハ廢絶とるゲ如くゐり來しを。再行ハるばく考へ集とめし信友ゲ功も。愛ゐべき事ふぞ有れ。扨ト料ふ。鹿骨を用ふる因緣のかくも有むゝと思得ゐるおとれ。上ハ云ゐをゐふ。此獸れおと。信友ゲ考ヲ集とゐ説ふ。鹿れ獸のゐるゲ中ふいを上代を聞えて。古事記ふ。ト料ハ用られ。ゐゐ文ハ。眞男鹿とゐるは。牡鹿ゐり。眞

は稱辭よて。まと佐袁鹿とも云ひ。佐も眞も。称辞よ云る也。古言ふ多し。和名抄ふ。鹿、音祿。和名加。牝鹿、曰麀。音家。日本紀、私記云。牡鹿、佐乎之加。顯宗紀よも。牡鹿此云佐嗚子加と。牝鹿、曰麀。音憂。和名米加。其子、曰麑。和名加吳。と見え。鈴屋翁云。万葉集中よ。鹿、字も皆加と訓べし。之加ふも必牡鹿を。牡、字を添てゝ。けひ心を著べし。鹿の一字を。之加を訓て宜きも。集中ひおゝふ一ッ二ッあり。と說れおきど。あも鹿く見られと。神代紀石屋戸、一書。ふ。眞名鹿を。ひゐる眞名も。稱辭ふひ。愛子を眞名子。万葉。まと出雲風土記ひゐる。あり。を云ふも。稱辭ふるを思ふばし。小石を。マナゴと云て。神寿詞よハ。日眞名子と。あり。ど書ふを。稍後よも。マサゴと云て。哥よも詠り。然きむ。ナ。ゆサも称辞ふり。小石を。マナゴと云も。石の。マナ子れ。る由ふるべし。亀兆傳よ。白眞鹿を云ひも。書紀よ依て。そ。きよ白と云言を添とるふら也。さて此獸を。後世ふ。カせ

ギとも云ふ。此も西行法師ゲ哥ふどを。り見えとり。煩ハしれ。ゆきも考へいもば。さて正しと云言ひ。ゆサも稱辭ふるを。疊て。誤違ふことふ。ひを稱と。る言ふ。ゆべし。トの違ふきを。トマ。サと云ひ。まとマスラヲと云も。正心男よて。則サウを切ひてスふり。益荒と書。く。ハ借字ふり。此語も。別よ委く考へ記せる物あり。さて。亀のマスラは。亀ひ正心男れ也。古ゆきふ就て思ふよ。所殺迦具土神、於頭。所成神名。正鹿山津見神とあ。迦具土の香山ふかをひ。正鹿の眞名鹿ふうをひて聞もるも。由あ也げふ也。今云。実ふ由あることふり。其香山の迦具土神よ由ある事い。第十五段よいひ。正鹿山津見ひ。鹿よ由ひる事も彼処よ。も云ひ。ふ。第百十三段天迦具神の処ゑ委く云ふべし。さて鹿は獸ひ。ひ。ゲ中ふ。上代を也聞えて。古ひ世くふ奇妙故事ひ聞もるも。殊よ

奇しく神ある獣なるが故なるべし。万葉十六に。藥獵仕へ奉る時に。爲鹿述痛作之歌に。鹿を獵ることを藥獵と云ハ。其宍を賞るが故なり。後ハ猪鹿なしゝと云ひ。宍獵と云もおもきなり。古も天皇なども此肉城免て聞食されぴ。梓弓矢手ばさみ云〻。もゝ〻待ぢと吾居ると知ふちを鹿の云〻。王に吾は仕ふむ。吾角も御笠のはやし。吾耳は御墨も坩。吾目らも眞澄の鏡。吾爪も御弓も弓弭。吾毛らは御筆の林。吾皮ハ御箱も皮ふ。吾宍は御膾もやし。吾肝も御膾もやし。吾美義も御鹽のもやし。云〻と云ひぴ。如此むこのり用ふる状を詠るに肩をトに用ひる由を詠ざるハ。思ひ寄ざぴしまや。既ハその頃も普く上に用ひざぴしに依て。知ざぴしに知ふや有む。今云上に引る神祇百首のうちをあろも忘もやせむ云〻。思ひ合せべし。たのもぢ既に。山里人共も

物のとれ所を。彼此きゝ置ぢるやう。鹿も獣の所なるが中に。其性直く大雅なるに。親子牝牡も感いと厚く。鹿の妻恋ふことも。古、とり感がりて。哥にも多く詠おれとり。今云。此事委くも。仁德天皇卷。夢野の鹿も処に注ふべし。まと癡愚なるが如くおれど。敏く殊れて聰く。朝野群載おる中臣祭文に。八百万乃神等佐乎志加乃八御耳乎振立天聞食止申と所なるも。由所なる事あり。○今云。此事おも委く論ひとるを。其も予が大祓詞再釈に注べし。本草にふ漢籍に。靈獣おる由云へるも。由縁所に説ひて。ひぢきふも神代をゆ在聞えと所。奇しく神し。妃獣ふぞ有ける。と云ぴ。おも此獣の事に就ても。予が思ひ得とる事等も有を。

そは此獣の事も出とる。其処〻に云ふべし。

於是天兒屋根命。以天香山出五百枝眞賢木。根許士爾許士而。於上枝。取著其天明玉命出所作出八坂瓊出曲玉。於中枝。取繫其天香山命出所作出八咫鏡。於下枝。取垂其天日鷲命出所作出由布而。此種種出物者。天太玉命。取持太御幣而。天兒屋根命。太祝詞言禱白而。神祝祝出。

根許士爾許士而は。御紀ふ。拔まと掘とも見え。師云。古語拾遺ふた。掘字を書て。古語佐禰居自能禰居自と見り。今云。佐た称辞よて。根掘之根掘あり。万葉八ふ。去年春伊許自而植之吾屋外之若樹梅者花咲爾家里。拾遺集よハ。去し年根おじて植し。と直して入と已。古今六帖ふ。秋野た根許士ふなじて持去とも。巖の種ハ遺しやはせぬ。おど詠て。根おゞらよ掘取を云。俗ふいふ根引ふけるおゞ。物をこじると云俗語も。是をりぞ出おらむ。とゐの已。ぢて前よ取れ体た。八十玉串と有を思ふふ。莖葉ぬふさやゞ外る枝を取て。齋場ふ指立て。飾と爲とるふ体ばく。此おゐハ。鏡玉おどを著ばき料おまをバ。殊ふ大外る戔根掘取れ体おる

ばし。さて此た。誰神の取れりと云ふことハ言。祢ど。上文よ准へて思ふよ。山雷神ふるべし。○上枝。中枝。下枝は。師云。譽田天皇御歌。まと雄畧卷三重。婇ゞ歌ふ。本都延。那加都延。志豆延とゐるふ依て訓ばし。下枝た。彼婇ゞ哥の中よ。三とび出とる。二ッた志豆延といひ。一ッ志毛都延と云已。今た此彼。多きふ依れり。まと万葉おどよも。本都延。志豆延と多くよ免已。此枝の上中下ふ就て。著し物の尊卑を言は。餘已言痛し。おゞ尊卑。紀由おらばも。玉た上鏡た中。和幣は下ふ著て。宜しかるばき物のさはおゐ。中を爭ぶおど云説た。殊よ漢意よ詔ひと。○其八坂瓊之曲玉。其字た私よ加矛於下外る強言おり。あるべき処おきぢ外り。さて曲玉。鏡。和幣。こ外上ふ注へ已。○取著た。師云。万葉三ふ。奥山乃賢木之枝爾白香付。木綿取付而。今云。

世ふ麻を白髪と云こと此哥ふ依るゑ古くりの傚おゆゑ也。はと十七ふ之良奴里能鈴登里都氣底。おぎもてのめ。○取垂師云。皇極紀ふ。折取枝葉懸掛木綿云く。万葉六ふ。木綿取之泥而。まと九ふ。斎戸尓木綿取四手而忌日管。延喜六年日本紀竟宴。得太王命。物部安興歌ふ。比佐嘉多能阿麻弖流呵美乎伊能留度曾。要多毋須恵く爾奴佐波志弖氣留。おどてのゑ。垂を志殿と訓て。志陀禮を約と言ふゑ。陀礼て殿と切る。孝德紀ふ。垂此云之娜屢。万葉十ふ。垂柳。十一ふ四垂尾。おど有もて知べし。志陀留ハ。繁垂の意ふゑ。万葉ふ。竹玉乎繁尓貫垂おどあり。ちて此垂てふ言多理多流おど云て。自然るゑ。多禮多流くて令垂おり。凡て活言て。皆この差別あるとそ。されど志陀理と。志陀禮とをも。此差を以て別ぎし。右の柳まと尾おどて。自垂物ふる故ふ。志陀理と云。此て物子垂らせあるおきど。志陀禮を約て志殿と云れり。後世ふ。四手と云物て。此用語を体語ふして。名とせるおり。採物歌ふ。賢木葉ふ木綿取垂。誰代ふ。神の御諸と齋ひそ米ゝ年。二の句。拾遺ふて。もふしでかゑて。とてゑ。拾遺集ふ。石上ふるゑ壯士の太刀もかゑ。組の緒垂て宮路通む。○此種く之物者。景行天皇紀。仲哀天皇紀おぞふ。賢木ハ枝ふ。鏡劔王を著て天皇命ふ獻きる事の有は。此段の故事ふ依きる。古への禮儀ふゑ。此とと委くハ。第七十九段。須佐之男命て。大御神ふ蘇雲劔を進ゑ給ふ処ゑ注ふべし。さて中昔までも。人ふ物を贈

るゐ。多く木草ハ枝ゐ著くアとしも。師説の如く。此段の榊ハ枝ゐ於々とる故事をゆ。起れることをあるべし。○太御幣。師説ゐ。和名抄ゐ。幣(ハミ)美天久良(テグラ)。靈異記ゐ。幣帛(ハミ)美天久良あどゐのアと。太(フト)は稱辭あアと。まと宇豆乃幣帛大幣帛伊都幣帛安幣帛乃足幣帛あども云り。美豆具良ハ。何物ゐ。ゐれ。神ゐ獻物の總名ゐれゆ。諸祝詞あゞ。ゐ見て知べし。名義は。まゐ古ゐ神ゐ獻物。まと人ゐ贈アあゞ。ゐ流ゐ物を。凡て久良と云ゆゞ見ゆ。後世の語ゐ。人ゐ物を與るを。久流と云も。是をり出とる事あるべし。其ハ古事記ゐ。千位置戸とゐゐる位。今云位字を書るハ借字あり。故。まと貞觀儀式大嘗祭條ゐ。倉(クラ)この史ゐハ座字を書ゐ。代ハ実ゐて。代十輿。代ハ実ゐて。即其物を云。續後紀一ゐ。圀造出雲豐持等。奏神壽(ヨホ)

(ヤタ)并獻(ル)白馬一匹。生(ル)雑高机四前。倉代物五十荷。此圀造神吉事を奏時。白馬鵠と共ゐ。劔鏡をも献アし例。神亀三年紀ゐ見え。まと五種神宝雑物を献し例。天長七年紀ゐ見え。まと彼神賀詞ゐ。白馬白鵠の外ゐ玉。横刀。鏡あど献るをし有れバ。此倉代物とハ。カヽる種々の物をハべ云あアと。ゐれどゐゐる倉ハ。倉字も借字あり。ハち幸美豆(ミテ)ハ御手ゐて。後ゐ天皇命ハ。御手ゐ於ゐら神ゐ獻アと給ふ物を。御手久良と云ひ習ゐ。其名を始へも廻らして。此段ゐも然云ゐるゐ。ゐ。今云。此外ゐ言れし説ゐまど。信ゲとく所思れど。此ゐハ漏し於。記傳八。巻見るべし。蜻蛉日記ゐ。美豆具良(ヒトハサミ)一夾(ダミ)二夾と。ゐるハ。絹布あどを串(クシ)ゐ夾みて。奉るを云ゐれアと。大神宮年中行事ゐ。寮幣者長串用紙挾也。○取持而。師云。凡ゐ御幣を取持(ツ)ハとハ。此時の例ハ隨ゐ。後の御代々々まで。

忌部氏の職業あり。次ふ引る書どもふ洽く見ゆ。まと神代紀下卷ふ。使太王命以弱肩被太手繩而代御手以祭此神者始起於此矣。此神とハ大物主神ありはと代御手と云ふ。皇美麻命ふ代り奉て御幣を取持を云ふ。御手と云ふ心を付べし。あぐ代りて祭ゆのみ見るハ精らぶ。まと祈年月次大嘗等祭祝詞辭別ふも。忌部能弱肩ふ太多須支取挂氏持由麻波利仕奉禮留幣帛乎。神主祝部等受賜氏事不過捧奉登宣と見ゆ。諸の御幣を造ゆ備るおゆも。此氏の職あり。書紀ふ。忌部遠祖太王者造幣云〻。古語拾遺ふ宜令太王神率諸部神造和幣ふ。まきた和幣と書さまど。諸物を云ふ。和幣ふ限らぶ。まと令天富命率日鷲命之孫云〻殖穀麻種云〻。天富命更分阿波齋部率往東土播殖麻穀云〻。まと令天富命率供作諸氏造作大幣。天富命ハ太王命の孫あり。四時祭式ふ祈年祭云〻。前祭十五日。充忌部八人。木工一人。令造供神調度ふど見えと。

○太祝詞言師說ふ。万葉十七ふ。中臣の敷刀能里等其等いひはらゑ。書紀ふ。使天兒屋命掌其解除之太諄辭。太諄辭此云布斗能理斗。大祓詞ふ。大中臣天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮。おきらた祓除ふ宣を云ひ。まと月次祭祝詞ふ。天照坐皇大神乃大前爾申進留。天津祝詞乃太祝詞乎云〻。鎮火祭祝詞ふ如横山置高成氏。天津祝詞乃太祝詞事以氏。稱辭竟奉久止申。おどあるぞ。此乃祝詞の趣ある。名義た。宣說言

あるばし。能流て必しも貴人に命おらでも。人ゐ物を言聞に沿を云。彼大祓詞ゐ大中臣ゐ宣と云るゞ如し。その外ゐも例いと多ゝり。○今云。師て宣説言と書れとまど。宣とり告説て書紀ゐ太諄辭と書る諄字説文ゐ告曉之熟也とあり。まと韻會ゐ朱倫切音与屯同廣韵告之丁至也誠懇貞程伊川曰厚也朱子曰懇至貞亦廣韵告之丁寧也とも。此意ゐ卍久度久と云言も。此の卍を卍ゐと卍意ゐ近し。俊頼歌ゐ。はじ給ゐ卍罪に卍ゐもめのかゐしさを。ぬゝのゐゑゞくゞ卍ゐる。冷云。加茂大人に詔賜言ゐりと説れしハ。師の辨へらきとるゞ如く何ゞれり。さて此哥に意て下ゐ委く云べし。ちて能理ヰと常ゐ云て言を畧ける卍祝詞字を書古とを師て此言の本意ゐ非ず。末ゐりを云を卍れど。そて詔賜と心得らきとる故ゐり。此事を神祝くゝ之とも書紀ゐあきて。彼字本意ゐ叶て爰とも云ゞとし。説文ゐ祝祭主贊神者ゐどあるて。此の義ゐ符へ卍。さて能理ヰを能都ヰ。まと能ヰゐぎ云ハ訛ゐり。又ノリトを。後ゐ表白と云ゐり。此て宮主口傳抄ゐ見も。

を。猶次ゐ云ばし。○禱白而。師云。泥疑麻袁志氏と訓ばし。禱字本岐とも。能美とも訓る是等に言を。古書ゐ考るゐ。本具て祝壽方ゐ云ひ。能牟て乞祈る方ゐ云ひ。泥具て右の二方を兼ある言ゐ卍。○神祝く之。本書ゐ。此云加武保佐枳保佐枳くとあり。神て神議神集ゐ卍どの神ゐて。尊辭ゐれり。富邪久て。今俗ゐも。同事を丁寧反復し言を。かく云ことの有は。古言の遺き体ゐり。谷川氏も既く。或謂今俗不憑情而益言曰保佐久蓋祝之遺也と云ゐり。漢籍周禮ゐ。大祝掌六祝之辭と云ひ。字典ゐ祝丁寧也。請求之辭とあきて。富邪久と

云ふ。祝字はをく當れ卍。但し今俗は富邪久といふ言ひ祝字の意ハ別く、あゞ操返し
もの言やうれこと、或は醉ふれとる人
れ操言にるおぎをれみ云ゑまぎおゆ。
久と疊と流ふ就て。餘の疊言れ例を思ふ。神集く。神議
議神逐く。稜威之道別道別ふどの類。おの餘はも全剝く。
も皆この例をれ根掘く、神和くおど
して辨ふべし。凡て集ひとる上ふまに〳〵集ひ。議れ
る上ふもおを密ふ議卍。逐やらふた。天上てたゞ。葦
原中国は妥住せじと逐やり卍。道別道別た。遙けき天道の
雲霧をゞ。卍分け押分け。天降れる由れるおどを合せて
思ふは。此も其如くふて。富邪久と云た。反復し請祈こと
ふハ有れど。猶丁寧は反復し。其事を禱白せる由ふて。上

ふ師の引きとる。俊頼歌ふ。波じ糸れき罪のおもり卍れ悲
さを。ゆゞれ聲くくどきおるゞあ。と詠るも。をく此て符
ひて聞もきぞ。神ふ禱言を白にをしては。其言を反復し
おゞ。手拍ち額突き。拜むゞ。も限卍無く。丁寧ふにるぞ。
古、れ道ふりれ流。おを此事た。正しき證を得て。考へ流説
の云る。太詞事の処は。委く注を見るばし。さて此歌詞ふ。くぞくと云る詞の意
は。信友説ふ。諄説ふて。心裏は念ふ事を人ふ向ひ。周諄説
しふるばし。糸を撮おど云。クルも同おと
ふく卍反し〳〵安る由あり。其た人は對
ひて言ふ上の詞おゞら。亦獨言にる上は。も然云ばきお
卍。俗言ふクドクと云も。我ゞ然希むと思ふことを。人ふ
諾せむとにる方ふ主と云おきされど。其た少ゞ轉

れる言状おゼくきぐ〳〵と云も。クリ〳〵の訛れる言あるべし。さて額れ聲くて額突て。乞祈くゝ伏る狀と聞也。上句は佛道の意ゴ此等共以て。論ふ足らば。思ふ。古神お申伏祝詞も。反復し〳〵申て。乞祈しある ごし。書紀ゴ太祝戸言を。大諄辭と書れしも。此義を得て れるべしと云ゼ。此說予ゴ考へおとく符ゴ。おや烟お思ふ。說と云言も。物おまれ事おまれ。結おきとるを解く意おきバ言の本も同じう侍べし。

爾集常世長鳴鳥而。互令長鳴。今世鳥名子長鳴出緣也。以天手力男神隱立石戸出側而。以天宇受賣命。示云天於爲神樂出長而。採天受賣命。香山出竹。於其節間彫孔而吹鳴。今世笛類也。木木合合而。備安樂出聲。天加奈止美命。興竝天香

弓六張(ユミムハリヲテレ)而。爲(レ)緒(ヲトサルノヲ)狙遠賀世(ガセヲテ)而。其子長白羽命(ミコナガシラハノミコトヒダリミギリノテニモチトトヲ)。左右出手。持茅與(レ)菅(スゲテカキナヅルトキニクガネイロノトビヲリタカハタ)而。奏出時。金色出鵄。居高幡出上矣。是倭琴出起(ノホトリニキコレヤマトゴトノハジメスガ)。須賀加伎(ノコトノモトナリカキ)出緣也。

常世長鳴鳥とは。師説ふ。雞を云ふ。此は今かく常夜往時ふ。集へて鳴せし鳥ある故也。後ふ負し稱ある也。其始不迴して。如此云る外也。思兼神をも。下ふ常世思金神と有也。こゝも此時ふ出て。謀ごちし神ふ依故の稱ふ依也。同例ぞ。此を常世國のあとゝ。一ッふ思ひ混るは誤れ也。その常世國は事は。下少毘古那神の段ふ委く云ふべし。此ふハ更ふ由ふきことぞ。長鳴とは。凡て雞は他鳥と也も。鳴聲の絶て長紀物ふる故ふ云ふ也。から書ふも長鳴雞と云ゲ雞を云ふ非ふず。見えとゝど。其は所べての今と同じらば。ちて此ふ此鳥を鳴せる所以は。下ふ說を待て見るばし。今云互字は古事記ふ無を。今は御紀ふ依て加ふ也。○今世鳥名子長鳴之緣也。此ハ神寶日出祕府ふ。古語云とて。今世

號島名子則金雞長鳴緣也と有を取て文を成せ已ぢて
島名子れとことれ内宮年中行事六月十七日れ御祭の處
ふ謂ゆる三節祭のそれ一ッあり從酉尅許鳥名子等參候於瑞垣御門外
擊志太良叩手也尾張よて子等のてうち〳〵をあさら
人諸共よ手をうれ音れ云ふとぞあさら〳〵とハ諸
法し てうち〳〵た手拍ち〳〵あるべし國友恒足云こと聞めきぢ云ある
の業師の大人の説よて明らかれり件の手を拍さ〳〵くお
とを称て斯多良といふ名義ハ即ち れ手をうちあく
音ちりや出れらむ其れ木竹あどの類をさく堅き音
とハ異已て已ちハの弱らうふ所垂る手掌をうちれく
互よ拍子をとりて手あく〳〵く音の自らしたら〳〵と
聞めきバあ已今れ俗言ふヒタと手をうれとも云ひ又
ペタリ〳〵とうつとも ピシヤリ〳〵せあく〳〵おと
ども云ふ言ちれ全く同じ意ぢへふとぞ有めき謳歌
件歌之中志多良宇テトテヽカノタエ波宇知波牟倍利
奈良比波牟倍利阿古女乃曾天也禮氐波牟倍利於比仁
也世牟多須伎仁也世牟伊佐世牟伊佐世牟多可乃乎仁
世牟又云志多良波志利宇知大津乃濱倍行波阿不毛乃
加波多知由加佐牟又云志太良波余禰波也加波く佐計
久美阿計天毛禮止美乃津加比曾又云伊計保良禮余波
知須波和禮宇惠牟波知須我宇倍仁奈女久良太天良禮
余又云伊佐多知奈牟遠志乃加毛止利美都麻佐良波止
美曾麻佐良牟哥雖多不委記歌畢後參候荒祭御前同勤仕其
後於舞姫候殿頒饗膳と見え此謳哥どものおと大抵ハ聞えれど又中ゐハ誤
宇脱字らと思れ所も有て委くハ解がさく一ッく論
ハむ事も中〳〵ゐ煩ハしく所思れぢ此ハ云ハば別ハ神

樂哥注解と云を著さむとに。御祭去みて祭使宮司を始其書の出るを待て見るべし。

兒。各〻直會饗膳ふ頒巳。倭舞畢る後の事を記して。次自舞姫。候殿。舞名子所。下部等。相具舞名子等。於齋王候殿與舞姫。候殿中間。謳歌吹笛又此職掌人之中二人。自四所職掌人之手。請取御琴持參會。其時撥奉仕御歌十二首㊀天ふ流や。八鴈ゞ中ふるや。我人の子。ざ。ものきどもや。八鴈ゞ中ふるや。我人ぬ子。㊁路ぬ邊ぬ木橘を。ふさをり持は。誰子ぬ流らむ。㊂遠江。こぬさの山乃椎ゞ枝を。ふさ折もてば。いまろもをる。㊃いを〻ぞいふ君ゞ世む。千世とぞいふ。千世とぞいふ。紫の帶をゐれて。いざやものそばむ㊄大宮の前ぬ流らきをざれ。流られ流られ。わゞかをへバぞ。ぬまもそろふ。㊅大宮ぬ前の川のきと。川のふかさい。後も長〻と見もきさまへ。㊆山川ふぬむやおしぬ女鳥。ましや此をふ。七度妻戀をるや。㊇山川ふゐてる黑兒ぬきソ。まさふくやをききふみて。おどりかけて。いざや遊ばむ。㊈みふみふき島ばゝりふぞある。あられふり。霜ぬく夜ぬ。夜ともさだ兒ぬ。㊉大川柳はむろくて。立流。大川柳をきアコニテ。おどりかけて。いざやものそばむ。㊋濱ふ出て。ものそぶ千鳥。ふくものや女ふき。小松ゞ上ふ。ものみふおろれそ。㊌橘ゞ本ふ道をふをてかぐはしや。わゞかをへば

ぞおもそふ。已上十二首。次第如此畢之後。阿麻乃オヒ
阿麻乃オヒト三度申。島名子等組手廻く後。各頭聚一所
伏。其後起各合手後退出也。件職掌人忌火屋殿上御琴退
出也。と見え。此哥どもの解説も上ゴ云ゲ如く。神楽哥注解と云物ゴ就て見るべし。斯して
東寶殿乃雄戸推開きて後。ゴ。雌戸は本多差拔ゴ推開きて。荷前の御調糸を納ゑ
奉ゴて後の處ゴも。琴生笛生。歌長。島名子等各勤役奉仕。
于時司中人長各申名奉仕。先宮司引裾進参半疊下穿沓
跪倭舞左右左拜如常云く。酒立女進以三角柏盃預御神
酒。地祭物忌父兄部獻之。一端取之呑取副笏對揖之後。左
廻拜御前著本座。次神主同前。但右左右也。次祭使同前。但左右左也。

云く。島名子舞廻。其後各退出。祭使宮司自南。神主自西也
ゼ見也。餘の御祭ゴ。島名子の事見えざれバ。三節祭ゴ時ゴみ仕奉ると聞えとり。此ゴ依て考
るゴ。島名子といふ稱の義ゴ。雞鳴子ゴ。天岩屋戸の前
ゴて長鳴せし処とる雞ゴ比て。置れとる故の稱と聞え
ゐゴ。組手廻く後。各頭聚一所伏。おど云も。雞の狀を效びとるおらむらし。斯て島名子ゴ長
鳴とは。此餘ゴ。舞を仕奉ゴ人ゴ。ゴ謳ふ歌ゴ。一二首ゴ過
ざゴを。島名子ゲ謳ふ歌ゴ。甚多ゴまざゴあるぼし。さまざど此ゲ謳
ふ哥の多ゴる事ゴ。雞の長鳴しとゴ比ゲて。殊更ゴ多く謳ゴし処とる。古くゴの定ゴある事ゴ。云も更ゴ。ち
て大神宮式ゴも。六月月次祭ゴ條ゴ。右月十六日祭度會
宮十七日祭大神宮云く。給酒食訖入外玉垣門供倭舞先

神宮司次禰宜次大内人次幣帛使次云〻次禰宜大内人妻訖齋宮女孺四人供五節儛次鳥子名儛十七日參大神宮其儀一同と見え禰宜内人等裝束は條ふ凡三節祭并解齋直會之日鳥子名儛童男童女十八人裝束青摺衣裳在前摺備臨祭給之料布十二端男二丈八尺女二丈五尺彈琴二人笛生二人歌長三人料布三端二丈人別二丈年終各給其身と有ひ然まで鳥名子とて別ふ立置ふ〻職掌ふは非ずて其節〻ふ童男童女を撰びて任し給ふ事ふ有り是ひ社註式ふ鳥名子地下駈役者也と註せるは例のいと濫あることとおりかしちて餘の書等ふは鳥名子と有るを式ふは二所ともふ鳥子名と有るを何まう是ふらむいと不審し

○天手力男神手力と負坐る御名の義は下第五十六段ふ云ふばし万葉三ふ石戸破る手力もがも十七ふ春は花云〻折てのげ〻む多治可良女ぞ式ふ紀伊国牟婁郡天手力男神社文德天皇紀齊衡二年七月以紀伊国天手力男神預於官社ふど見も

○石戸之側は大御神の幽居坐まは石屋戸の掖ふ

○隱立は師の加久理多知氏と訓むぞ古言ふ依推古紀哥ふ訶句理摩須とあり沼河比賣歌ふ比賀迦久良婆とと紀ひと言れ多まど此は此神自らの御心と隱り給へるふあらば思兼神の謀ふ依て諸神は然令爲給へふまだ迦久斯多底天と訓ばし此處ふ此神を隱立せる由は次段ふて知べし

○常世長鳴鳥云〻

のおと記紀ともに思兼神の思謀とあへる最初の処より記さるべきなれど文の連続に必此に在ばき事あり故に事狀を思ひ辨ふべし まさに手力男神云々のこと御紀に長鳴鳥云々のさし次に有れど宜しれまど餘れ諸事より前に有るに何ぐあり此は記に天手力男神隱立戸掖而天宇受賣命云々と有ぞなき故今れそなきに依り故

天宇受賣命天於受賣命名義師云古語拾遺に天鈿女命

古語天乃於須女其神强悍猛固故以爲名今俗强女謂於須志此緣也此注を思ふに此書の傳に鈿女と書る文字に書紀に依るあり○今云おの古語拾遺の傳に依る時は淤受賣と云を正称として宇受賣といふを亦云去称と為べきぐ如くあまぞ今に多きに故きて淤受賣を亦御名と定免故延喜七年進大神宮譜圖帳に此段の事を云へるふも天乃於須女とあり源氏物語帚木卷ふ例乃腹立怨ぐるふかくおぞましくはいみじ兒契深

れとも絶て又見じ河海抄に形遠文選とあり はと夕霧卷に人聞もうあて於ぐ乃しかるべきぐをまゑ東屋卷に物ぢ〜みせぐ疾ぐかふれぞき人ふてぱと浮舟卷に浮舟君の川に身を投むと思ひそれにことを云る處ふぐおしぐかるばきおをを思よるふぐをむらし形どにる皆婦人の詠とを云て右の意ふ和名抄に護田鳥於須賣止里常在沢中見人輙鳴有似主守宮故以名之とにる此事篤胤別に考あり下第五十七段大宮能賣命の処に云ばし今世言ふも於曽伊まと於受伊と云ことにる ぐと いやしき言に延受伊といふこと有も是くり轉れるあるべし けて此神の强固こと下文まと猿田毘古神の段に見や○今云宇受賣神に下に次く見とる如く太ぐき

功乃神ふ坐まにを誰神の御子と云こと諸書ふ見えさる事ふく又神名式ふ此神名れ社ぞてた一社さふ有こと無くまさ式外ふも此神を祭れる社のをさ〳〵聞也ふこと外きた不審き事ふり篤胤ゞ思ふ由た下第五十七段大宮賣神の処ゞ云べし。○爲神樂之長而ふた上代本記ふ此た謂也る御鎮座本記ふるを元〳〵集ふ此名をもて引る処ふ凡神樂る故ふその古名ふる事をもめてかくた引ふ

之起猿女君祖天鈿女命採天香山竹其節間雕風孔通和氣今世号笛類也亦天香弓興竝叩弦今世謂和琴其縁也木く合〳〵而備安樂之聲云〳〵と見え神祇本原元く集ふどふ引る古語ふも此時の神遊乃故事を記せる處ふ人長者猿女君祖天鈿女命也と有ふ依て記せ卍そは次ふ考て注せる如く笛を吹るた天香山命ふるべく琴を弾さ依ハ長白羽命ふるを上代本記ふ共ふ宇受賣命ふ係ふるを思ふべし。ふも此命の樂長として事

執らもく〳〵ふ依てふり。餘書ど安ふも神遊の起原をゞ凡て此神ふ係て言傳へと卍ちて樂た阿曾毘と訓べし。其た師説ふ阿曾毘た管弦歌舞さぐひを云て樂字ふ當まめ。和名抄ふ雅楽寮宇多麻比乃豆加佐と見え顕宗紀ふ奏楽ふどふる訓宜く聞也まぞも。ふわ思ふ阿曾毘と訓ぞけむ後世ふも此段の樂を即神遊と云卍神遊た即神樂ふり神樂歌を古今集ふた神ゐのそびれ歌ぞあ依ふて知ばし。神樂をカグラと云ことた古書ふハ見えゞ○今云縣居大人も神樂哥注ふ神樂ハ神ゐのそびと唱ふべし。楽の事を後の物語ふあそびと云り。かぐらぞ云た後世れ言ふて古書ふあきことあめ也言れとれど此ハさ乃〳〵古書ふ洩とるふて信ふた古言ふるべく所思る由あり其た五十六段嘘楽の処ふ注ふを見るべし。中昔れ物語書ふ抒ふも管絃をもはら御遊と云ゆ。おちくぼの物語ハ樂をあそびがくと重祢ても云

ヲ有り。續紀十五ヲ。皇太子ハ五節舞を舞給へるを御覽て。太上天皇の詔ヲ。今日行賜布態乎見行波。直遊止乃味爾波不在之氐。天下人爾。君臣祖子乃理乎教賜比。趣賜布止爾有良志。止奈母所思須。（誤れり。今は古本ヲ依れり。）ヲ有モて。樂を遊と云ふと此本を辨ふぢし。（但し君臣祖子乃云云は。おちとき漢意あり。樂は。とゞ遊。あることそ。直き本の意ヲは有れ。）ヲ有。此事ヲ委曲ヲ仲哀天皇巻九年阿曾婆勢大御琴と有処ノ注せるを見るべし。爲長而は。宇受賣命さし配ヒて。琴笛おど戯。遊の調ヲ合ル事を。神等某々ヲ令せ給ヲ依由ハ。ヒぢて長は。後は書どもヲ見えある。人長の縁ヲ。其は後世内侍所の御神樂ヲ。人長といふ有て。然爲る狀を思ひ合せて知るぢし。（元々集ヲ。人長者。天鈿女命也と有るを思ふべし。内宮年中行事ヲも人長の事ヲ有り。）そは下ヲ引る書どもは下ヲ注ふを見よ。（さて天宇受賣命爲神樂之長而と云へり。今世笛類也と云るまで。上ヲ引依上代本記の傳ヲ依まり。）○節間は。布斯阿比と訓べし。（本書まと元々集おどヲ。余麻とあるは非訓あり。其は下ヲ引依和名抄ヲ見えとる如く。余とハ。節と節との間をいふ言おまバ。節間を余麻と云ときは。節を余と爲とる例ハ有れぢ也。）和名抄竹具ヲ。野王案節。竹中隔而不通者也。和名布之と云ヒ。（竹之木具ヲ。節。和名布之。今案。從竹者竹節。從草者草木節。見王篇とあり。）ちて節間をは。節と節と此間を云て。和名抄ヲ。兩節間俗云與と云る是ハ也。（但し兩節間を与と云を。俗と云るといかゞ。然まだ節間。二ヲ。書紀の哥ヲさ有る古言おるをや。）字を合せて。余とも訓ぢし。信友說ヲ。和名抄異本ヲ。笠竹之

与

兩節間ニ云答とも有ㄗ。まと名義抄ふ。答ハ竹ノヨとあㄗ。かくれ如く。余は兩節間あり。布斯て其余の隔あㄗ。六帖ふ。吳竹のたげくも物を思ふ形。一ト〻へ多ㄊるふしれ抜らさふ。狛朝葛記今様歌ふ。竹れをあぢくㄊのハれあふしもち多ㄊびか死る抜〻云〻。と有ふて〻く通と

ㄗ。今云古今集ふ木ふもあらぬ草ふもㄊのらぬ竹の〻れと詠るも節と節との間を云り。ちて余と

は。此〻り彼まで。と限ㄗㄊる間れ古とあり。故竹節の間を余阿比とも云り。余波比とも云て。ア。ハ通て世云ふあㄗ。人ふいふ齡も生のうぎㄗの間を云ふ。〻のあグ人て人と云あり。然云ふ余〻り轉りてぴろく世中とも云るあり。

世云る〻然る説ふて。世代あどれ字を余を訓むも。言れ本て同じ。是ふ就て思ふふ。人壽の長らむ古とを祝て。竹杖を贈ふこを。由ㄊㄗて所思も。其て拾遺集ふ。一ト節ふ千歳を古むる杖ふまだ抜くとも盡じ君グ〻はひて。と詠るもて知ばし。寿命の長らむ古を祝て杖をもれ安ふ事を漢土〻ㄗ移る事との誤あり。抑杖の始て見えと る て。

み思ふて。古を考ずげる誤あり。抑杖の始て見えと る て。伊邪那岐命豫母都国〻ㄗ還坐ひとき。女神れ追給ふを塞て。その御杖を投と乃へるふ來名戸之祖神の成坐て。この神豫母都国〻り荒び來る物を追却と乃ふ御功ませむ。此謂よりて人の禍事を拂ひ。齡を延る意よて。神ふも奉ㄗ。人ふも杖を与ふる事ハ。古くを〻り有れむとれ

ふも。其て神楽採物ふも。杖てありて。皇神の御山の杖を山人れ。千歳を祈りきれる御杖ぞ。ともあるを以て。然て思て ふ。 ふり。然ふを後よくさぐさ漢説を交へとるれふべし。○彫孔而は。阿那乎保理

氏と訓べし。○吹鳴た。本は逼和気とあるを、それ漢文おまぢかくた改さるあり。布伎那志を訓ばし。鳴を那志と訓こをハ。古事記ふ畫成の成ふ此字を書て。訓鳴云那志をあるを。師説は。古へ琴を彈鳴を比伎那須。笛を吹鳴を布伎那須鼓を打鳴を宇知那須おど。凡て鳴を那須といひし故ふ借まるあめと言まちふ從まを。○今世笛類也。笛た和名抄は。布江をあり。布延といふ名義た。もと吹き吹くおどいふ用言の吹を音便は布伊と云ひ。伊を延た。さしく轉る音おる故ふかくも言るが。遂ふ此物の名をおまるおはべし。職員令は。鼓吹正をツヾミフエノ正と訓み。神代紀は。伊弉冉尊の御魂を祭る古とを云る処は。鼓吹とあり。諸越ふても。ツヾミフエ又鼓吹と書はあり。和名抄は。横笛不論唐狛是横吹之揔名也を有ふても。布延た吹の轉語おりとた知られと。ちて此文ふ依て考るふ。

此時作まを依た。正しく笛と云ばう。ア此物は非で。節と節との間を用て。風孔を雕て。童子の持あそぶ比伊比伊をいふ物は狀おどふ作まアしふて。比イ比イと云名た。その鳴音ふとれるおるし。彼横笛と云もは狀は非ざアし故ふ。笛類也とた云るおらむ。大抵物の始まりハかるもはふおむ有る。常陸風土記は。崇神天皇御世ふ。建借間命は東国の荒賊を平治る處て。天之鳥琴。天之鳥笛と云をもて。遊樂しとるおと見も。此た何おる形の笛おりれむ。今知ばらば。今世は鳥笛と云ハたまど。其た鳥多獵る者は鳥をさそふ料ふ。その声を似せて製れるものは。其誘ふ鳥ふ依て。笛は狀た各く異おり。大抵た比イ比イと云物は狀は。さてさまは吹鳴玄物おめ。然まど古の天之鳥笛た。さる類て有まじくおぞも。はと本朝

事始ふ。天磐笛。文武天皇御宇止（但以横笛替之）事代主命製之奉
天孫瓊〻杵尊（出齋部私記）以磐名之以祝天孫也。其形似胡笳
云〻とあり。此は事代主命は製らち〻趣ふまゝ。此時を
ぞは遥ふ後の事ふぞ。然まど是も正しき古傳ふる事た
疑ふし。（ふを下第百三十一段ふ委く云を見るべし。）さてかれ上代をゆ。種〻の
笛の有しを。後ふ今は横笛といふ物を。替用ふる世と形
ぞて。上代をゆの笛は製狀ハ。稍〻ふ込ふりれむかし。（其本朝事始ふ文武天皇は御世ふ。替とる由云れど。ふを前の御世ふるべくぞ思た。）○横笛。和名与古布江。律書楽図云。本出於羌也。漢張騫使西域。首傳一曲。李延年造新邑二十八曲と見え。此抄の契冲書入ふ。古学書を引て。横笛。和朝傳來。推古天皇御宇。味摩子來朝傳之。以後漢土之楽師來朝傳之。ぞあり。此餘篳篥。篠。長笛。短笛。尺八。中管ふ

ど。和名抄ふも見えと。ぞて此時笛を吹鳴とる神た。文の
ぞ。悉皆のら物ふり。趣ふてた。宇受賣命ふゆげふ聞ゆまど。決ふく天香山命
ふぞ有れむ。故その御裔ふ。笛吹氏は有れ侯べし。（此事ふを第四
十六段笛吹連の処。第五十二段波〻迦の下ふ云ることゞもを合せ考べし。）○木〻合〻而た。
木登木袁宇智阿波勢氏と訓ぜし。（本ふた。サクビヤウシウチテと云訓字添て。
後世ふも然云ぬまど。此た字音の言ふまむ取らば。）信友云。古樂書ふ拍子。（以木造之筋拍
子也。）當時諸樂打之事中絶。神樂東遊等用之とあり。（和名抄ふも拍
子。俗云百師切。韻云。拍。打也。拍板。楽器名也とあまど。此た起原を漢土ふ係とるふて非言ふり。既く神代をり有し
事ふるまや。）後ふも神樂ふ筋拍子と云ふと有れむ。此その起
ふぞれゆ。（但し筋拍子と云称た。後の言て。本ハ決ぬて称た。）ふく。木と木とを打合ハとぞ云へり

れ。○備安樂之聲は。阿曾毘能聲爾阿波勢を訓ぶし。備を阿波勢と訓おと。いかゞよ聞ゆれど。字のまゝふ曾那閉と訓むな。古言ふ伝ら歟。○木木と云ゝめおきまで。上代本記を取れり。○天加奈止美命と云ゝ伝。緣也と云ゝ万では。本朝事始ふ。和琴号也麻止古登上古天津神樂奏令加奈止美命製之但横雙六張弓以須雅乃葉左右手奏故又號須賀古止有須賀く幾乃調以此爲濫觴と見え。まゝ神祇本源ふ。此時の神樂事を神宝日出祕府といふ書を引て。古語云。御琴神。金鶏命孫長白羽命也。用天香弓六張叩絃也。即高幡上金鶏居因以象也。故名之鶏琴也今世号和琴是也といひ。亦金色鶏飛來于弓弭。其鶏熄狀如流雷。由是作其尾形也ともいひ。上件神祇本源ふ記せる傳な。北畠親房卿の元く集ふも見えとるを。互ふ入混ひ乱とる文のあるを。彼此合せ見て引るおり。まゝ上代本記ふも。此時の神樂事を記せる所ふ。天香弓興竝叩弦今世謂和琴其緣也と見とる処どを察合せて作る文おめ。その委き説な次くふ注を見て思ひ辨ふべし。天加奈止美命。事始ふな天字おきを例ふ依て補さめ。名義ふ。上ふ引る古語ふ。金鶏とゐ字は義ふて。金色は鶏と化ゐ伝し故ふ。かく名ふ負る処らむ。おれ下ふ云を見ゝ。ちて本朝事始ふ。加奈止美命者。高皇産靈神。與神皇産靈神之子也をゐまゝど。此な疑おく。天日鷲翔矢命おめりゝ伝。其な上第四十九段ふ註る如く。天日鷲命な。弓削連の祖おると。上ふ引る古語ふ。金鶏命孫。長白羽命とゐるとを。合せ考へて知らゐ〳〵処伝。

但し此古語ふ孫とあれぞ。此れ子と有べきあり。其れ第四十九段ふ。委く論へるを見て知べし。されど出自の傳れ達ふことおし。かくて此命れ。弓を削らち〳〵神ある故ふ。其弓を興竝べて。琴の始と爲給ふ事ふ。○興竝天香弓六張而。天香弓れ鹿を射取る由の名ふて。實れ梔弓ふ。委くは下第百九段天之波士弓の処。ふ云ばし。興竝とは。其弓どもふ弦を張り。その弦を上ふ那して側ふ興竝とる由ふ。其弓れ數れ六張ふりしとれり。此故事のは〳〵。後まで倭琴れ六絃ふり。其れ和名抄ふ。日本琴。万葉集云。梧桐日本琴一面云〳〵。體似筝而短少也。有六絃。俗用倭琴二字。夜万止古止とのり。新勅撰集ふ。六の緒のをり炎ふとふぞ香れふ。彈く少女子れ袖やふきぬる。まと康富記。

文安六年九月十七日。大炊御門殿被仰云。和琴天照大神岩戸出給候時。神楽器也。弓六張並彈之依之有六弦云〳〵。ちて原れかく六絃ふ。ぬしを稍後ふれ。その數を増も減ふも爲とめと見えて。清寧天皇卷ふ。八絃琴見え。東舞歌ふ。七絃の八絃れ琴ふど見え。まと北史倭國傳ふ。樂有五絃琴とも有れば。さる琴も有しふこそ。信友云。繼體紀歌ふ。隱口れ泊瀬の川も。ふゞれ來る竹の以矩美娜開余曩開。もやべをば琴ふ造ぬ。安ふ笛ふ造ぬ。ふき鳴安云〳〵とある。以矩美娜開れ。以れ發語。矩美れふもぬふて。枝葉の扶きて。ふさやゝふふもぬとる由ふめ。今云久美はふもぬと同言ふる由れ。余曩第六段。久美処の下ふ委く注りき。開れ。節間の長き竹ふめ。節れ近きハ。何ふ安るも便あしれまば。答の長きを佳とは。古事

記ふ。河辺之節竹を取て、八目の荒籠を作ㇾ。とあるも其意あり。鈴屋大人云、余も両節間ゝとおもぎも、古をり通ハせて、其なも節と書は常あり。しかく云へるは、枝ゝ分ら一本ゝ竹を云るふ所を、末べをゞ笛ふ造ㇾとゝ末の細きのゝを切て、穴を彫て笛ふ作る料とし、本ゝなゞ琴ふ作ㇾとゝ其竹の本ゝ太ゝ方を、琴ふ作ふ由ふて、其ハ竹ゝ本ゝのゝを切て、割て彼琴ゝ絃を張る料の竹と爲る由ふㇾ。哥の意ゝ。あゞ琴笛の事を、その作る本をり、みやびて言ゝ、おゞけゝと云る詞のみふㇾ。されゝ原は弓を竝ゝて彈鳴とる證ふㇾ。此ゝ傳ゝふ思ひ合せて辨ふべし。但し此歌ふゝ竹と云へきゞど、此時ゝ弓ゝ、天香弓とあきゞ、梔弓ふることゝ、上ふ云ふるゞ如し。○長白羽命、此ゝ上ふ御名の出ある處ふ委く注る如く、天日鷲命ゝ子ふㇾ。第四十九段見べし。しかゝ父神ゝ香弓を張て琴と爲給へるを、此神の搔鳴ある万へふふㇾ。そゝ上ふ引る古語ふ、御琴神、金鵄命、孫長白羽命也云云と見え、本朝事始ふも、令加奈止美命製之といへきど、此神の彈る趣ふハ見えざるを、思ひ合せて曉るべし。○左右之手持茅與菅而奏之時、菅のふとゝ下第九十一段ふ注ふし、奏ハ加伎那豆流と訓べしとて、文意ハ聞えゝふ儘ふㇾ。○是倭琴之起ふは今世ふ所謂倭琴ゝ。安外ハち此縁ふゝㇾて、出來る物ぞとの意ふり。扨此ふ見ある如く、始ゝ弓を竝て奏とゆふを、いはゆる倭琴ハ、其を便とゝ製きるふて、安とゝ直ふ許登と云ゝむを異国をㇾ種くゝ琴を貢奉しゝバ、其

を新羅琴百濟琴ふど云ふ對へて別て倭琴とは云るふ
ゐべし。下第八十六段。ふ見と俗天沼琴まと上ふ引る常陸風
土記ふ天之島琴ふど有も。いろふる狀の琴ふ巳れむ知
ぢらず。まと許登といふ名義も。いろど思ひ得ず。細音の義そふどいふ說も信がとし。○須賀
加伎之緣也。須賀加伎も菅搔ふて菅をもて搔叩ひをし
ゐ巳。此も後世まで此時の由緣ふ依れ巳と聞えて。神事
の時も。然らぬ時も。和琴を彈くとても。初發ふ爲ゐるふ
とふり。其も貞觀儀式。五節舞儀の下ふ。笛工調發聲次調
御琴。空擽御琴三聲。詞云。牟奈須哥ゝ記。次拘手三度。詞云。牟奈手。云ゝ。于
時舞妓四人。一行徐歩云ゝ。東西分座舞訖昇殿。卽奏大直

歌。本末二度。安米四度。訖退出とあり。此を信友說ふ。牟奈
須歌ゝ記ハ。歌を謠ふ以前ふ。ゐゝ擽ゐとくして。字書ふ擽擊也
とあ巳。ぎゝぢと搔鳴ひを由ふて。歌も唱雅ふ合ひる調の
ふきを云と聞も。そも東遊風俗歌。常陸ふ。比太千仁毛田
乎古曾川久禮。阿太古ゝ呂也。加奴止也。支美加也。末乎古
江。乃。乎。古江。阿末與支末勢流。師說此哥乃乎之處頗異前哥之音格又及其末琴之須
加ゝ木其詞又替流阿拍子延也。ぎ巳をのり。此を取て。源氏物語若紫卷ふ。君
も大殿ふおはしゝ時ふ。例の女君。とみふも對面し給ハ
ぬ。物むずゝふれおぢえ給ひて。あぢまを出がゝきて。常
陸ふも田をふそ作ま。と云歌を。聲ハいとふま。ゑ紀る。出

さび給ふ。とも云くの有、さはりて、物むづかしくて、東哥を哥ひあげら、琴は調子を彈あはせとも
菅(スガ)掻(カキ)、絃(ヲガ)掻(カキ)、片掻(カタカキ)とて、神楽催馬楽より用ること有と云り。ぞ云る
おどを合せて。ぞ〳〵ぞ攪鳴し給るこゝを。思ひ辨ふ
ぢし。舊説より、菅を干とさるを攪集むる音ふとへとる由
云るも、然る説おきど、本末とゞへめ、須宜も、本は須
賀と云へるゞ本、意ずて、其は云くにる音よりを号け
とるおぼべし、又或人の説より、安元二年右大臣家哥合より、
初雪を清輔朝臣おし祢ゝるおぼの歌かゝき白さへふ、
むらひもあゞ炭つもる雪かあ、此は稲を刈とて稲ゞら
を攪を歌る音を、歌がゝきと云、るおめ、此哥琴より琴せとさ
る詞もおく、全く稲ゞらを、歌ゞゝとかく由の詞おら
むと云へれど、この歌がゝきの紀ハ、さの誤より、菅笠拘
おるぢし、然きず哥はを聞もきど、此ふは用おし。
手(デ)は。絃(ヲ)を爪ふ拘(カク)るおとはみよる。此も調へよは非ず。故ふ
牟奈天(ムナデ)と云る爪ふ拘ぢし。但し此は、後ふは菅をもて搔鳴
にことハ止て、あゞ糸爪をもて

鳴しあり。さきど其称をぞ、古、
のは〳〵より、須賀〳〵伎と云へるおり。今世より琴を彈(ヒ)く
をぞ。まぢ空搔(ムナカキ)ぞる歌。須賀〳〵伎といひて。此を祝事(ホギワザ)とに
るおとは。此ふ依て爪るぢし。琵琶、まは三味線おどいふ物を彈ときも、此事をにる
は同事おり。さて神樂より和琴を彈こゝは。おれ其縁(ユヱ)ふて。大嘗
祭式ふ。琴彈二人と云のは。此琴を彈人おり。薩戒記、鎮魂祭條より、神祇
雅楽、神琴師彈、和琴、おど
も見えとり。おゝ多〳〵ぞ。伏見院、天皇。夜神樂を詠ませる
大御歌より。小夜ふけてやまと琴は音ぞみふ〳〵ぞ。人の心
安神さぶるはで。鴨長明が無名抄より、和琴のおこりは、弓
六張を引おらして、おきを神楽ふ用ひ
れるを、ぞらいしとて、後人琴ふおくぞうつせる。と申
おは傳、とるを、上総国の済物は、古記注し文の中ふ、弓六張
とゝきて、御神楽料とゝけぞ
ぞ。いみじき事おり。ぞ云り。○亦號須賀古登(イフスガコトモ)とは。此時

菅をもて搔撫(カキナデ)ゐ已し所由(イハレ)ふを以て。和琴を示(ヲシタ)菅琴とも
いふ由あり。但し此号(ナ)は。ち〳〵より外は。いまゞ所見(ミル)とることゝあし。けて。本文ゐ舉と
る傳の如くおきゞ。琴は類の彈物は神は。加奈止美命。長
白羽命ゐ外むおはしれる。此功績ゐ依て。祭られ給ふる
御社は。何處ゐ在らむ尋ぬべし。伊賀風土記ゐ名張郡賀
土社。穴穂御宇奉崇也。神跡者。気長姫尊也。と有り。賀羅坤
土は。韓琴ゐるべし。此は彼大后の。韓を征伐と方へる時
ゐ始て韓琴を得給
へる所由ゐ。とゐり
て。祭きるゐや事の
おいでゐ記し出ゐ

於是天宇受賣命。以天香山出
(コヽニ アマノウズメノミコト ヲ アメノカグヤマノ)

天日蔭爲鬘。以天香山出天眞
(アマノヒカゲナシカヅラト ヲ アメノカグヤマノ アマノマ)

拆手次繫而。以天香山出小竹
(サキタ スキニタスキテ ヲ アメノカグヤマノ ササ)

葉結手草而。手持鐸著出示而。
(バユヒタ グサニテ テニモチサナギツケタルホコヲテ)

纏出祟。於天出石屋戸前。舉庭
(マキイデ ホコト ヲ アメノイハヤドノマヘ アゲニハ)

燎。伏汗氣而。蹈登杼呂許志爲
(ビヲフセ ウケテフミト ドロコレシ)

神懸而。云比登布多美用。伊都牟由那那。夜許許能多理。毛毛智用呂都而。相共歌舞。掛出胸乳。裳緒抑垂蕃登矣。故高天原動而。八百萬神共咲矣。是時出

俳優者。神樂出起也。

日蔭乙。古事記ハ日影ト書キ。御紀ハ蘿ト作テ。此云比輒磯ト有リ。拾遺ハ蘿葛者比可気ヲ有リ。今ハ齋宮式ハ師云。齋宮式供新嘗料物ハ。日蔭二荷トモ。日影葛二荷トモ見ヤ。サテ和名抄祭祀具ハ。蘿蔓比加介加都良ハ。ト苔類ハ。蘿比加介。女蘿也。松蘿一名女羅。万豆乃古介。一云佐流乎加世。纂疏ハモ。蘿謂垂苔也。古今集物名ハ。さかゆ。ゆ。俗謂日蔭葛トアリ。是ハ。女蘿ハ。松枝ハ生テ甚長ク。色青ク帯ル如クアル物ト。漢籍ドモハ見エズ。佐賀理苔ト云フ名モ。松上ニ垂レ懸ルヲシアリ。或説ハ。地ハ延ヘク物アリト云ヘル非

あり。○今云。此蔓は。樹上をう懸ると。地は延ふ。此物奥山との二種ありて。形狀は共に似たる物あり。

あらでも生ぶ。まゝと乾ても。色青くて枯びとぞ。堀川百首に顕仲朝臣。哥は。露かゝらぬどうぬ。をもおしと詠るも。此由なるか。○今云或說は。日蔭とは根れたる蔓のことをあり。と云るハ。此哥おとを思ひて。はや根おしは其子を藥はも用ひて。兎絲子と云ふものあり。万葉十八新嘗會宴ふ。足日木乙山下日影う豆良けるう子ふやさ藤ふ梅をちぬゞむ。とのゝ。ぬと十四ふ。夜麻可都良加氣麻之波爾母。衣可多伎可氣乎。云〻。おきは加氣と詠るも。蘿おゝ。二は。山蘿影尓所見乍とあるも。山蘿を枕言として。影は蘿の意はゝ。けとるおと。此十四の哥はて知ばし。今本は。山字を玉ふ誤れり。十三は。雲聚山蔭とを。ゝるも。鈿ふ垂とる蘿おり。此山字も玉ふ誤き。此外は。山を玉は誤きる例おゝ多し。

を有ぬ。ぢて此文本書は。手次繁天香山之天之日影而。爲鬘天之眞拆而。とのれど。蘿を手次は用とぬしこと。御紀も古語拾遺も。皆同じことあり。此は錯亂おきゞ。日蔭を鬘ふ。眞拆を手次と替とる由は。古史徵ふ論きバ。此は省きぬ。此段の徵見べし。ぢて近代は。白糸はゝとは青糸を組て。冠の左右ふ垂はゝ。を。日蔭鬘と云は。此物ふ代用らはゝ。ふて。名れみ古を遺せはおゆ。ぢて此名義は師云。天皇の大殿を稱へて。天之御蔭日之御蔭と隱坐まは。と申は。おは天は借字ふて。光を蔽ひ隔おる雨を蔽ひ隔て。日の蔭といふ意おり。如く。此鬘を頭をゆ垂はゝ。も。本は日光の万濃ゆきを。翳隔おる料おる故ふ。日蔭とは云おゝ。其由は下ふ云ふ。縣居大人說は。蘿は。繁木ゞ中ふある古木の。日も風もあとらぬ枝は生はゝ故は。山下

日影と云ゞ言れくいかゞ。○眞拆古語拾遺ふた。眞辟葛と書ア。造酒式ふた眞前葛とも作ア。繼體天皇紀歌ふ。磨左棄逗囉とあり。此物の古ゞた。冠辭考ふ委く見えたア。古今集神樂採物歌ふ。みやはふハ霰降らし外山ふる。眞拆の葛色付ふ峯ア。さて此よのみ。天之香山之といたぬた。師説れ如く。每ゞ文を畧ゝるのみあり。是も同く。彼山のあることゝ。ちて外宮儀式ふ。眞佐支乃鬘をゆゑとゝ見え。古今集採物歌ふ。巻向ゝ穴師の山ゝ人も見るゲふ山鬘せよ。此を奥儀抄ふ神樂ゆゑるふた。眞前乃葛ふて頭を結ふアア。そゝ玖山鬘とた云と註せア。然れど上代りは。眞拆をも鬘とせし例り。但し此ゝをゆこきハ。本書ふ為鬘天之眞拆と云ゆゑを。一向ふ誤とた定ゲとゝ

ふ似さまゝど。ふ不此た上ふ引る。高橋氏文の證もあまバ。縣居大人の説れ如くふるべし。さゆこハ。眞拆た鬘ともふゆべゝまゝど。日蔭た手次とふし難ゝれバふり。○手次繫而。手次は。師説ふ。書紀ふた手繩と書て。此云多須枳と云ア。繩字ハ。多須伎ふ當らゞ。其故た。ゆゑ古の手次も。今世ふ。賤人のかくると。全く同物ふて。允恭紀ふ。盟神探湯の処ふも。諸人各著木綿手繩而赴釜探湯ふどあア。然るふ。繩を負兒と見えて。多須伎の意ふし。字鏡ア。繩負兒帶也。須支。まゝと繩束小兒背帶。須支と云り。是ふ依て思ふふ。兒を負ふ帶を。須支と云を本ふて。袖をかゝぐる帶をも。手ゝりかゝくる物ふまゞ。手須支とハ云ふるべし。故書紀ふた。手字を添て。多須伎ア此字を用ひらまゝ。ゆゑ。和名抄ふ。本朝式云。褋裨各一條。褋多須岐。裨知波夜。今按未詳と見ア。褋た。袖を挙る由の倭字ふるべし。万葉ふた。此と同く。手次とのみ書ア。次字を書た。次を古言ふ。須伎と云例ア。天武紀ふ。次此云須伎と見え。中昔の物語ふ

どふも。ひき〳〵れどあるなどと見也。をのゐ。さて手次繋を。多須伎爾多須伎と訓るは。上ふ引ふ高橋氏文ふ。麻作氣葛乎。多須岐爾多須岐氏。とあるよ依まゐ。助も同言よて。安と用言おゆ。餘古書ふ見えざる古言ゐ。多乃〳〵ふ殘れるおゆゐ。○小竹葉ハ。師云佐〳〵婆と訓ばし。允恭卷。輕太子の御哥よ見也。卽本書よ。訓小竹云佐〳〵と有。万葉十四ふも。佐左葉とをみ。今世よも然云ゆ。今云。和名抄よ。篠和名之乃。一云佐〳〵俗用小竹。二字謂之佐〳〵。細〳〵竹也と云ゆ。俗よゐ笹字を書く。ゆり。佐〳〵と志乃とハ異おり。をく古哥を考ふべし。さて万葉集よ。佐〳〵那美下の佐を濁るゐ誤おゐ。○今云。思ふべらば。と云ふふ。神樂聲浪と書る佐〳〵浪ハ小浪おり。小竹の意を。馬。囮。気。多。郡。郷。名よ。樂前と書て。暑て神樂浪とも。樂浪とも書ゐ。和名抄よ但佐〳〵乃久万とを免るも云ゐり。は。此の故事ふ因て。神樂ふゐ小竹葉を用ひ。其を打振音ゐ。佐阿佐阿と鳴ふ就て。人等の同く音を和せて。佐阿佐阿と云ける故おるばし。猿楽ゐ謠物よ。さ〳〵〳〵の巷ぞ楽む。と云も。松風の颯〳〵と云音をり。是よ云。らけさるおり。はと竹葉ゐ名を。佐〳〵ゐ負ふも。此音をゐぞ出おらむ。細〳〵の意以て名おゐ。ふゐ非。ゐ。小竹と書る小字ゐ。幹ゐ小きを云るよて別おり。神樂歌古本。殖槻。總角。大宮。湊田おどゐ處よ。本方安以佐〳〵〳〵。末方安以佐〳〵〳〵。ゐ云おゐをゐ。是ゐ佐〳〵佐〳〵ゐ唱へるろ。まさゐ佐阿佐阿を如此書ふり何ふまゐ。彼小竹葉の音ふ和せおる聲をゐ。出おる事ゐるばし。○結手草而ゐ。あの天宇受賣命と云をり是まで。古事記を取て文ゐ作おゐ。師云。多具佐爾由比而と訓べし。今云。拾遺よ。手草多久佐

とあり。印本は多、上は今字あるも誤あり。今ハ古本ニッは今字あるをきり。結とも數枝を合せて本を結束ぬる外ヒさて持と云ふぞ手草てふ名ふて持ヒとも自ら聞も。かゝ依處古文おヒ心を著ばし。採物歌ふ水垣の神ハ御代をヒ小竹ハ葉をあぶさふ執て遊けらしも。手草を多夫佐と謠ひ誤れるあるべし。○手持鐸著之示茅纏之稍おも古語拾遺ふ天鈿女命手持著鐸之示と見え御紀ふ天鈿女命則手持茅纏之稍とおのるを合せて思ふ。師說は著鐸之示といひ茅纏之稍と云依も。あゞ名の傳の異ふ所ハみりて實は一ッて此鈿女命の持る示おヒ。と云れしはさる言ふて示ハ去ばては茅をもて纏てそれふ鐸を著とヒしを鐸示とも茅纏之示とも云ひれむを御紀はも茅纏之示といふ名をもて語れる傳を記さも拾遺ふは鐸示といふ名り語れる傳を記せ依れゆれゆ故鐸著とおるを本文と爲し茅纏と有を示云と記しぬ。但し師說は御紀ふる日示をも同物は解れとるも誤あり其も古史徵ふ辨ず於。さて鐸は天麻比止都禰命ハ作き依おヒ示は手置帆負命日子狹知命ハ木を以て造れるハと決し。此等を造れるおと並は上ふ見えとり。神樂取物ふも鉾あヒて歌ふ此示はいおおハ示ぞ天ふ坐ハ。ぞをう姫の宮ハ御示ぞ。哥意も既ふ上は注りき。ちて茅は和名抄ふ大清經云茅一名白羽草和名智とおのヒ今世りも

然云ひ。摘丸バ血れ出る如く赤くあむ草あり。○於天之石屋戸前。是より拳庭燎まで。拾遺よりとまめ。此れ師言れ如く。此前の種々れ事も。皆あれ石屋戸前ふて以ふ事あるふ。此より始てかく云るれ。紀記拾遺共ふ此より始てかく云るれもとより。前れ事共れ神とちの身ふ付て ひ古文の仮あふべし。爲ふ態ことれ庭火を舉と宇氣とれ。正しく其處了設置く物あれど。此より至て。其處をば云べき勢あひ。さて此より云るゞ自ら前へも後ゞも通ひて聞ゆるは。まと古文あひ。後世あふべ。まれ始より云おくべきをや。○舉庭燎。此事古事記より洩とり。和名抄ふ庭燎。和名邇波比。庭火也とのひ。御紀了れ火處燒と見えとひ。此れ庭の處〻爾。火を燒る由の古言あるべし。凡て岩屋戸段の事共れ。ふふふ種くあるよりく符ひ。師云。凡そ後世神事ふ有ることれ。大抵此時の神遊れ事態の遺れるあまバ。さはく〻の事ハ有れむを。古事記より書紀よも。多く畧きてぞ傳りれ。さて庭火を燒とふる由れ。上ふ常夜往くとある如く。世中暗くて。種くの禍事発れるあまバ。庭火を數〻燒て。昼の如く。世中愛と況有状を為て大御神を欺き出し奉るあり。斯て此を佳例として。神事及び事ある時ハ。篝火を燒き。又魂祭あどふふふも。皆あの時より效へるあり。○伏汗氣而。是より爲神懸而まで。古事記を取ひ。此れ宇氣布勢而と訓べし。御紀了れ。覆槽置と書て。覆槽此云于該布西。今本布西二字を脱せり。今い類聚国史ふ有るより依れり。師云。書紀の書ざまハ。置字ゞ伏と云より當きり。覆字れ。汗氣れ形を云へる字あり思惑ふことゝ勿れ。師云。是は此物れ上ふ立て舞ふ。蹈て響ひらせむ爲ふ。蹈とどろこし。と云ふよて知へし。中を空虚ふ設とる臺ふて。形状の節れ如く

あ依故ふ。名義て空筒（ウツケ）あ卍。或人今東より。物ふ水を湛、て其上ふ麻筒をうおぶせて抑、て浮の意とも云べ々まど。此ふ依らば。水ふ浮さるばくも非ず。彼て響鳴こと。の此ゐ似とる。と云へり。此ふ依らば。上ふ立て舞おるあれ。と云へり。同く宇気とて云あらむ。まと書紀ふ覆槽と書き。る。ふ付て。以馬槽覆之。あど云へ依説て誤あり。あ〳〵て馬槽ふはま。酒槽ふまま仮て覆用とさるふい非ば。本とり別ふ設けとる。一ッの器あり。されど正しく塡べき漢字のあき。故ふ。其形状ふとゆて。覆槽やい云ゐるぞうし。後れ書ふ宇気槽と云へるも。槽ふ似とる故ふ。然云ひあせるもの。あり。○今云。あわ拾遺ふ。覆誓槽と書て。云ゐる説の誤ること。あど。委く辨られ。さて此物。後世鎮魂祭儀ふ遺とり。記傳ふ。就て見るべし。れ卍。鎮魂ふ。此段の儀を用ら依〳〵て。日神のこもり坐る。を招奉卍し心ぞ矛を以て。遊散ば。る魂を。招き鎮む。依あるべし。

貞観式ふ。大蔵録。以安藝木綿二枚。實於筥中。進置。伯前。御巫覆宇氣槽。立其上。以桙撞槽。毎一度畢。伯結木綿。

記。御巫舞訖。次。諸御巫。猿女舞畢。江次第ふ。次。御巫衝宇氣。衝宇気神遊儀也。以賢木衝槽上也。結糸自一至十云〻。四時祭式。彼祭料物ふ。宇氣槽一隻とあ卍。○伊豫国大洲人語りていらく。我ゞ大洲辺ふて。神事ふ舞人の立て桙をもて衝鳴去物あ卍。をけぶせと云ふ。其形状て木鉢と云物の如くふて。と大く。径三四尺許ありと云へり。おま正しく今と同じ意あり。○蹈登杼呂許志。師云。登杼呂許志て令動響あゆ。加志と云ばきを許志と云るて。所知看をシロシメシ。所聞看をキコシメシと云と同くて古言あり。万葉六ふ。山も動響ふ。まと宮も動くふ十一ゐ。馬音の跡杼とも爲れど。まと瀧ふ響動ふ。十四ふ。石も等杼呂ふおゐる水。古今集ふ。天の原ふみやぐろかし鳴神も。云〻。源氏夕貞巻ふ。おわ〳〵や鳴神と卍も。おどろ〳〵ちく。ふみやぐ

ろかゑ。からうじのおやも云〻ゐど有ア。書紀ふた。鼓と
も見ゆ。迹驚、岡おどあり。おゝは汗氣を蹈て。響鳴ちむるを
云ア。後、世ゐ神事ふ大鼓をうゑた。此音を效びしうや有
む。今云、大鼓ハ、和名抄ふ、律書楽図云、尓雅、大鼓謂之
鼓、和名於保豆く美。一云四乃豆く美云〻、卽建鼓也とあり。此餘ふ、摺鼓、鞨鼓、鼙鼓、腰鼓、まさ多ぐふ鼓おど見えあれども、皆からものあり。さて都〻美と云名、義も、革もて包とる由の名あるばし。然れど都〻美や、清て唱ふべし。

○爲神懸而。御紀ふハ、顯神明之憑談と書て、此ヲ云歌牟鵝可梨とあり。師云。おも崇神紀ふ。神明憑迹〻日百襲姫命、曰云〻。顯宗紀ふ。月神著人、謂之曰云〻。天武紀ふ。高市縣主許梅。儻然口閉而不能言也。三日之後方著神以言云〻。言訖則醒矣おゝ。古事記。仲哀、段ふ。於是大后、歸神、言教覚詔者云〻と有も同じ。皆俗ふ所謂託宣おり。但此

らは。正おく某〻れ神の。有ばき事を告覺し給ふるを。今
此段の神懸ハ。物ち著て正心を失ふる狀ふ。えも云ぬ綺
戯言を言て。俳優をれひを云おり。正心よりて。其人の得言まじきおとを。包ま
ぬ言おどを。神懸とた云ふり。俗、著物ふいはじるといふ狀おり。次、文を合せて。
其意を曉ばし。古語拾遺ふハ。此語れくて。多ぐ作俳優相与歌舞とのみあるハ。神懸も俳優の中おる故おり。御紀ふ。作俳優、示云〻。神明憑談とあるハ。俳優と別ふおとる書ざまおり。さきど手持茅纏之矟と云るを。以羅為手繩と云るとた。只一連の事と聞えとれど。実た別事ふ非ざるこを明けし。然きバ別事れ如くあるハ。書ざまのなしきおり。拾遺た此を意得て記るもれおり。学者をく味ひ見をうし。諸註の説。みお此段の意ふかゑて。ゑ。口訣ふた。称辞申也と云ひ。纂疏ふた。讃談日、神之至德也といひ。或た。神れ出坐むおとを。祈る言おりといひ。或た八百万神の靈。こと〻く憑るおアれど云るみお非説おり。もし

此等の説は如くに、兒屋根命の祝辞はこそ申し給ふべ
くまでまと八百万神に現はす其庭ふ集へるものをいかで
か他は憑る古との有む。只私記ふ此神明之憑談與他處爲少異也諸
神欲令日神深見奇物故俳優万態云々。然則是假爲之言
未必有神所託也。と云るぞ宜しかし。多くは易くと輕く見ぬ
く説ふに、後世漢意は諂ふ学者の病ふり。凡て此宇受
賣命の事態は前後ミふ俳優ふることを、れど思ひ過ぎ。
○比登布多美用。伊都牟由那々。夜許々能多理。母々智豫
呂都に。六言四句は諷語ふるを。後了に數名とふれ已し
ぬ。其ものまぶ。比登布多美用に。人蓋令見ふて。人とに。石
屋戸は前ふ集へる。八百万神ふちを申し。神を人を云る例に下は大御
神の御言は頃者人雖多請と八百万神を詔ひ海宮の段
了井有人影と火遠理命のおとを申せるまと豊玉姫は

哥は赤玉の光ぬはありと比劉播伊珮耐君がをそ蓋令
ひしさふとくにのかりぬ。ぬにる比劉ふど是ふり。
見とは。石屋は戸を見をとは言ふ。戸を布多と云るふ
ぎも戸に塞ぐものふて其やがて蓋ふまぢかくも言ハ
むらし或説ふ布多ハ將ふり人將令見れりと云ぬ考合
はべし。下照比賣の歌ふ布多和多流と詠るぬ。万葉ふ登和
多留と詠ると同言ふるべくおぼゆ。伊都牟由那々は。稜
威萌成々ふて。大御神の招事ふ感坐して。石戸を内をゆ
細開て御覽はよ。其御光は外よりし出はを。稜威萌とに
云ふるふらむ。まと伊都ふ出の意もにるべし。かの伊豆
之道別々ふど云言よも。然る意はとも
ぬて聞もるをも成々ぬ。ぬに。それ御稜威は。外ふ現れ出
思ひ合はべし。
はを見て招事の謀は成々。と悦べる言ふるべし。成を那
とのみ

云る例も名てふ言も業れ省言あるまて知べし。夜許〻能多理も彌心之足ふて。大御神の出御ひ狀あ所ふ彌心の足と悅べるあ卍。心を許〻と云るも興台産靈神の許〻あど是あり。まと俗言ふ心地あど云ときも心をコヽと云へり足も多良斯と云も同言ふて。天足し圓足し。まと息長帶比賣命の。帶も同じ。こ外滿足の意あり。母〻智豫呂都は股乳宜ふて。裳緒を蕃登ふ抑垂給へまバ。股の顯れ〻むあと炳くまと胸乳をゝ乳出あ乃ふる故ふ。股乳宜しと。戲言し給へ所あるばし。宜を豫呂都と云る例ハ。萬幡豊秋津比賣と申ひまと。御名の萬も宜をいふ言あるを思ひ合ひべし。と膕あらむゝをも所思も。其も股をさふふゝき顯し給ふまで。膕も現あるあと灼く。殊ふ允恭天皇卷ふ見さる。

大前小前宿禰の歌ふ。宮人の脚結も小鈴おちふきと。宮人とをむとあるも。正ふ此も。宇受賣命の故事をを免卍。宮聞も所ふ。足結の小鈴云〻といふ所ふ。若くも態と御足を豫く呂くと蹈あどし給へるふや。とち乎思ひ合さ所まで。但し膕も和名抄ふ余保呂を所まど本も決免てヨロあるゞホのそも卍さるあらむ。然る例ハ曾理山を曾保里山といひ氷をコホリと云るれど是あり。ちて膕を用呂と云は。用呂布所あるを卍出さる名あ所べし。甲を用呂比をいふもをろふ物あれバいひ万葉ふ取をろふ天香山とも詠り哥ふ足結の小鈴と云るをも思合さべし。足結やゞて足のをろひあるをや。はと宜の用呂。歡の用呂あども。足ぬあを所をを卍云て。同言も活用るゝ所べし。まと丁をヨホロと云も走使して膕を労くより

云るあらむ又俗言ヨロケル。ヨロツク。ヨロメクおど
いふも。腦をり出とる言ふて。ヨロケて。腦壞れはべし。
ちてたれ歌後ふ。數名とあれる由て。此を諷ひて舞給へ
ふ依て。大御神れ御心和みて。石屋戸ゑ出御せまむ。稱
美べき言れ極あはる故ふ。天宮よて。常ふ誦へ美とゆしゞ。
言あまて。終ふ數名とちゑ爲とゆと所思とゆ。其て比登
布多美用て。一二三四あゆ。あを數よ云とき八。都をつけ
安あハち箇字の義れり。此て終ある万の都よあらひて。
添とるあるべし。中よ百と千とを百智千智と云て百都
千都とて云ゞとき故ふ智を云るあら伊都牟由那くハ。
むまと二十三十四十の智も是ふ同じ。
五六七あゆ。五を五十五百あど云ときて。イと云ハ。ツを
いまゞ思ひ得ず。六ゑムと云て。牟由れ約まるあ
ゆ。今も六日をムユカを云ハ。古言の残れるれり。夜許く

能多理て。八九十あゆ。年中行事秘抄ふ。八をヤヨと訓る
加。とるあらむまと十を。本あるて。四を弥と。由よて。後よ
哥よ。登袁と見え。今も然言ふとといふゝし。其て タリを
約免てて チあるを。トを云むおを て。同行の臣よて。外よ
も轉れる例あれど。然も有べき事あまども。韻てゝあら
ず於おらでハ。得有まじき物あるま。袁を而るは心得難
きを猶をく思へど。淤と遠を混れとる例いふしへよも
彼此あれど。此も古く混ひ於るあらむまと秘抄の訓ふ。
タリヤと有るて。鎮魂祭よて。一をり十はで云ふ故ゝ。十
て終あまど。添とる辞あはべし。前よて足弥の義ゝとも
思ゑりしゝど。然て有まじくおそ。ちて二十を。ハタチと
云て。二十箇ゝ。フタはハを約まゆて。ハト箇あるを。其ト
れタと轉れはあはべし。まと三十をゆ九十までの十を。
ソト云こを。トれ横 母く智豫呂都て。百千万あゆ。百を五百を
よ轉まるあるはし。
八百を云ときのみ。ホと云ふて。上代をゆの言あらひあ
るべゝまを。此て母くれ約まり母あるゞ。ホよ轉れるよ
て。守をマホりとも云例あらむゝ。又後ふ訛りて。マムリ
と云を。まとマブリと云も。母と富。牟と布よ通ふ例とい

し。皇国の数名おれうて盡さず。外国こまた此数の餘まだいと事痛し。其れ西戎国まて万を十合せさるを億と云ひ億を十合せさるを兆と云へども億を十万といひ兆を百万といひて更また支あり。彼国まても此等れ数名を設けさきぞ其国籍まも多くれ億を十万といひ兆を百万と云てあるをや。摠て物の数ハ限りあき物あれバ其名を悉く設けむとせむ何わど設けとゆとも足まじき。神の定免坐る数名は数少くていうわぞの数まても数へ尽さるゝおとれいとも妙あるおとれめのし。

ちて後ふ。櫛玉饒速日命れ天降坐ける時ま。天津神十種の神寶を授ひて。若痛所あらば。茲十種を合せて。一二三四五六七八九十と云ひて布瑠倍。由良〻〻と布瑠倍。かく爲ばらむれ死人も生返らむと。教導し給へるれ。鎮魂祭れ縁あるを。彼御祭ふ。宇受賣命れ裔とる。御巫猿女君等。それ事ま掌ぞて。御巫宇氣槽の上ふ立て。桙もて其宇氣を撞く数ま十種寶れ数ふ合せて。一とゆ十まず。聲高らゝふ唱ふる事れ此の謂ま因ことあぞ。其れ古語拾遺ま。鎮魂之儀者。天鈿女命之遺跡と有を以て知ばし。天津神の御言ま。此を誦さらむれハ死人も生返らむと詔給ふ。流を畏み尊みて。等閑ま思ひ奉ぞそ。鎮魂ま。此段の儀を用らるれ。日神れおもり坐るを。招ましし心ぞ。以て遊散る竜を招きおむる意あり。其れ神祇令義解ふ。鎮魂言招離遊之運魂鎮身躰之中府故曰鎮魂と有るを見て知ばし。おわ神武天皇巻元年。鎮魂祭の処ま委く注せるを合せ考ふばし。○相與歌舞おの一句古語拾遺ま取て補へおぞ記紀ともふ。れ語おきハいかゞおぞ。相與歌れ。宇受賣命と八百万之神あちとれぞ。宇受賣命の謠

ふよ続て、八百万之神の舞て、宇受賣命ふのみ係れ申。を諸臣ふ哥へる由あり。舞

く事、狀よ心を著て思ひ辨ふべし。○掛出胸乳。おきより共咲矣まで、記を師云。胸乳とて。上代よ。多く知とれみ云て。人身と申ず。

ふ有る乳ふ限らず。他の物ふ甚多く有を。總て云名ふて今世よも、幕あどふて此名遺れり。胸と云ざまで。混ふ〜故ゆやあらむ。掛

出て。加伎伊傳を訓ばし。加伎は搔、字を書と同くて。凡て

手して作る事ふ附いふ辭ふり。さて古て。掛を加伎とも

云申と見も。故此字を借て書る申。明宮段よ、掛出其骨とあるも同じ。まと

万葉九よ、懸佩之小劔取佩。こまもカキや訓べき

ふ申。今云カゲロフを。カギロヒと云るも同じ。ちて此

出は。伊陀志と訓べき理ふれども伊傳て自出るふり。伊陀志ハ、物を出に申。

伊傳と云ふら牙申。武烈紀、歌ふも。阿娑理豆那とて。此も求申出に外と云意ふり。それ外中古の雅語よも皆かく云申。さて

乳て。婦人の。人ふ見らふ〜ふとを恥て。い多く隱に物ふ

るを。今世よも、婦人の乳を人よ見に事を、深く恥る国あるあり。故ふ搔出して見去

ふて。正心を失て。物ふ狂ふ狀を申に ふり。こま即神懸の狀ふり。○

裳緒は。毛比毛と訓べし。書紀の訓ふ依まり。裳を結る紐ふ申。○抑

垂抑字、記よ、忍垂ふて申。今て御紀と、古語拾遺とふ依れり。師云抑て。輕く附云ふ辭ふ

は非ず。抑牙下に申ふり。此態も。乳を出に と同意ばへ申ふり。

今云、御紀よも拾遺よも、此ふて此事ども見えに。多〜巧作、俳優とのみ有て。猨田毘古、神の段よ、天鈿女命、奉勅、而往乃露其胸乳抑下裳帶於臍下而向立咲嘱と見えと。

り。かくて古事記よハ、まと彼所よて此事ふし。傳の異ふ

る中に此に有りとまさにておおもさて拾遺今本に抑
字を押とあれど今は塙本に依まり其は御紀ともあへ
まぢあり凡て此神の人に恥じてかゝ依態ぞもを爲るぞ宇
受賣の名に負る強悍(コハキ)なる有れる沙石集と云物に和泉
おとおれる事を云る所に云年(ネン)なげとるみに赤幣として
並ある先ぐ已なさはゝ式部ゞ貴布祢社に祈作法して鼓をうち前をか
き上て多〳〵就て三返先ぐ已て是躰にせさせ給へと云
に和泉式部面うち赤めて云く千早振神の見目も恥ゞ
しや身を思ふとて身をや捨べき此巫
ゞせし態あ〳〵の態れ遺れるあるべし○動而ハ師云由
須理氏(スリテ)と訓べきゝ万葉七に大海之磯本由須理立波之
とあるゝ同巻に大海之水底豐(トヨ)三立浪之とあると全同(モハラレ)
意に聞も(かくて此動字登余美と訓ぜ由須理と訓むも何事ゝ有む)まゝ物語書あど
に世中ゆゝにゝてれぞ〳〵多く云ゝ其は舉(コヲ)てと云意に聞

も依を此も其意を帯て聞もれぢあゝ。おちくぼれ物語
に物見る人〳〵に世ゝにてわらはるゝと云るは全(ラ)此と同
じ。まゝ登余美氏と訓むも惡ゝらぢゝゝ有ゝ。今は登余美を取れれ。○咲矣
師云此は宇受賣命は俳優を觀てをかしけに笑(フ)あまぢ。
和良布(ワラフ)と訓ばし。惠良具(ヱラグ)と訓ぶべし。其由は次の歡喜咲樂とあ
る處に斷(コトワ)まゝ。○是時之俳優者神樂之起也。おは時の俳
優を神樂まゝ猿樂の起(ハジ)あゝと云おゝと古書に多く見え。
誰(タレ)もく知まる事あまぢバ今更いふまでも非ぞ。其は上代本紀
神祇本源元〳〵集神皇正統記あぞに此を神樂の起といひ粟田口猿楽記に抑猿楽と申に事を皆人狂言綺語は
戯とのゝ思へり然るに神道の隨一にて侍るそれ源を
申さバ天照大御神天石戸に引おもらせ給ひし時八百

万神さち哥をうゑひ神楽を奏し給ひれるとり岩戸もひらけ世も明るゝ事あれよりしらば神を和らげ世をゝさむる事あれよ過さる事あらじされば今よ至るまで神社のまへ人の家ふても祝言の始よハ狂行ふあらひよて侍るあど云る共よ然る言ありゝし猶上文為神楽之長而世を治る処ゝ云るを合せ考ふべし かくて其神樂の式を委曲ふ記せる物を見ず内侍所御神楽式といふ書ある由あれど予いまだ其書をさ不ふ得見ず けて俳優を和邪袁伎を訓ばし。即御紀よも古語拾遺よもあゝ訓ゝ俳優字を漢籍よ雑戯如猿猴之状と有を取られしあるべし言義は。師説ふ和邪は童謡謔あどの和邪と同くて今世よも。神まと死人の霊あど祟るを物の和邪と云是ふゝ。○其を常よを多く祟て凶き事よれみ云れど本は凶よも吉よも遍る言ふゝ かくて何事ふまを人の口を假て神の歌ハせ給ふを和邪歌と云ひ言せ給ふを言和邪とは云ふゝ。禍も神の為し給ふ意を以ていふを言れ多る如くふて俳優も神懸よおきて云稱ふ事神懸の態を爲て大御神を咲ましまはせ奉しを云ふて袁伎を袁加斯比約れるあるばし加斯を伎と約まる師を招れ義よ解じくおゝも其を此ては招とあて通もれど下ふ挙さる火須勢理命の俳優を招をしてを通ゞさゝまばあり けて神樂は元を巫れ隨ふ加具良と訓ばし此も古言と聞えあれどあり加茂大人の神遊考よ始て加具良と訓しらど其を惡ゝりゝ巫とて加微阿曾毘と訓べき由を論ひ加具良と言るこを古書ふ見えば言れあまど其を之ゝふ見えざるよこそあら免七百年ぞのり前の書と見さるよ伊呂波字類抄と云物ゝハ神楽をカグラとあり言義を神恵良ふて加年は加具とふ巫恵の省巫多ふよ其意を得て神

樂字を塡(アテ)とるべからし。牟(ム)は久の濁音ふうなり。其具は宇韻あれば。惠のはぶうるべき語勢あるを思ふべし。惠良は。笑ふ狀をいふ言なり。其れ下ふ嘆樂と有(リ)処は云り。起也は。波自米那琉(ハジメナル)と訓ばし。琉は者(モノ)の結詞なり。けて内侍所の御神樂をはじ免。神樂と云へば。もはら神の御前ふて爲る遊態の名とあれるを想ふ。此の謂ふ因て。神遊は。古くは猿ゞはしき態の。可笑(ヲカシ)き事を主と爲と已れむゞ。後ふ漢風(カラザマ)に調子(シラベ)を用ふ流世とあめて。漸(ヤヤ)く古風(キフウ)は廢られて。嚴重ふる態なれみ。雅(ヨシ)やける事とてあまりれむ。漢籍ふ俳優字を雜戲如(シ)猴(ヒ)之狀(ノ)と云り。然るハ其字を取(ラ)れしを以て。猿樂と云に。舞に更あめ。神樂も。此の俳優ゝり起りおれど。本に定免て。漢風の嚴あらば。可笑ゝりれむ事知べし。其に世ふ傳ハる神樂歌、

譜と云物を見るふ。大の〻と漢風の譜(シヅ)あるを以て知らるる已。加茂大人云。伶人家ゝて書集免と云。躰源抄と云物ふ。舊神樂譜(ギ)昔貞觀御時。神宴之日被撰定云〻。次朱雀院御時。貞信公攝政之間。被始御神樂云〻と云り。此に古〻ゝり。神遊ふうとへる哥れ有ふあらひて。今の京の始れ人〻。何まとゝみゝへしを。貞觀ふ其宜きを撰ませらきれむ。其を後ふ神樂譜と云るあるべし。其後延喜れ御時も。或に去已或に加へられしあらむと言れしに然る說ありれめ。○躰源抄云。平調に金商あり。西方音あり。神樂に本は平調あり。依爲亡国音。後ふ成壹越調云〻。又云。資忠云。上代に神樂に気比宮神樂に用盤涉調云〻。又云。資忠云。上代に神樂に無調也。而近來免べて以壹越調爲之。我世ふ相替る事是也。といへり。さきふ記せると異あるハいかゞぞや。今思ふふ。此說まことふ然るべし。ちきの神樂に。もと平調也と云る說に。ひゞあとあ流べし。これふ我世云〻と云るは。此資忠と云し人の世れ有どふかく替りぬる由あり。師云。資忠に。堀川院れ時の人あり。此事も体源抄ふ見えて。王ゞつまふ引已。然きば今傳に流神樂歌も。古のに多く絶て。後

れ歌の多く交れりと所思とりて其の中に言句の數も調はざる狀にて自然に優美く咲みたりて剛きぞ古に近うるばく所思とる今傳れる神樂哥の中に古今集より以下の集に何某れを先る哥と云ひ多くるをも思合せべし然らでは此の故事をりて起りて神遊と云ひ神惠良と云ふ叶てざれでおゆ其れ樂事の起る本意を按ふに歌は歌れ一に心れ種とれりて哀くも憂はしくも方に心の感くをゆ歌ひ出れども咲榮え悅ぜ去れて歌ひ出るぞ本おゆける其れ誰やし人も心悅ばしきをりを見て知べし哀く憂てしき時も謠ぐに阿波礼と打出らるのみにて強ても今樣おど吟ひ出ぐときもおるを以て知べし かく音舞を舞ふ本意は謠へども哀き心に得堪ざるまゝに手を伸し膝をうちて それ謠ふはよく拍子を合せ折も猶足びまふ立舞て其歡ぜ去れ情を述る態おれぞ究屈し れ漢風の調子おどは舞樂れ本意に叶てびおむ其れ佶屈しき調子に合せて舞ふ心屈みて伸やうれら哀ひ哥れむと為てれおの折らに樂うらぬわざおまバおり然きぞ歌ふも舞ふ毋各く某某れ手伸しく可笑去れ意のまふ〳〵物にるぞ正義に叶は有りに然るを漢國ふて樂れ世を治先人に道理を教ふ物の如く云るに例のさかしらおりうし はと琴笛をれじ先樂に用ふる器を鳴りに古とも此れ歌と舞とに隷るぬのおきぞ謠ふも舞ふ毋隨意おる上に其歌ふ聲と立舞ふ足搔に隨ひて左も右も拍子を合に

ばき物ゐ正。其れ此よ。菅を以て弓弦を叩鳴し。竹ゐ孔を彫て吹鳴し。木と木を戎うち合せて。樂れ聲ゐ備せと正を有も。其趣ゐ聞も侭をや。然るを後世よれ。おの本義を忘まて。調を本として。其よ哥舞を合さむと為る故ゐ。眞の宮風を失ひて。其謠ひ舞ふ狀を見るよ。人れ然も思れざるよや。弓ゞ見聞くゐれ。却りて憂苦不正のごと思ハ侭ゝをや。かく言はゞ。其ハ律呂の旨を知らざるゐり。れど云も有べけまど。律呂れ。おゝらゐ。謠ひ舞ふうへて備ハる物よとそあれ。本と正定。おきく。哥舞戎そきよ合れる物て非ざるをや。

けて猿樂は。神圀史ゐ。伊勢風土記ゐ引く処。申樂と書て。サルマヒを訓るゐ同く。佐流麻比と訓べし。俗よ佐流賀久と言ふ哥叫れざるゐり。此も古言と聞も。後の物ゐゞら。東圀紀行と云物ども。さて言の理て猿舞の訛れるゐ侭べし。其れ古き道の記。物語書ども。さきよ舞と云ることあ正。此れさるゞうわざ。さるゞうがましく。されぞみ。されくれゞ

ゐ侭ゐど。多く見とるれ。猿てふ言をはとらゝし云るよて。咲しき態れるを云りと聞もれず。さきよ舞ハ。猿舞ゐること知べし。さて今世よ。ゐやきといふ言ゐるハ。此言の存きるよや。○又さ侭ゞうれ。若くハ猿樂の字音ゐるゝ。樂をガウの音ゐ。言義は。猿女舞ゐて。其は猿女君の祖神を免ることと有り。れ舞れ侭風ゐ。をかしき舞態を為ることゆ云ゐるゐらむ。谷川士清も。既く猿樂れ。猿女氏の傳へさる樂と云義ゐり。と云ゆき。さて漢籍よ。俳優を。弥猴の狀れ如しを云るよ就て。彼獸の人をまゐびて。笑しき事れるよ思ひ合せて。猿舞といふれ。彼物の狀ゐ。狂はしく舞ふ故ゐ云ふ。おど思ひ紛ふばゝら爻。おれとはゝゐ。趣きの似とるもの。ぞ猶按ゐ。猿れ猴田毘古神れもゝり。れ物故ゐ。猿女神を眞似て。をゝしき態をれるゐり。故もろおしぶゝよも。猿の如く戯ると云ふことあり。猿ゞ猿女神ゐ似とるゐ正。それ舞れ侭狀れ。正しく見えと侭れ。火須勢理命れ。火遠理命ゐ伏ひて。汝命の俳優者とあらむと云て。面と掌

ふ赭を塗て。褌をけ。タフサギて手塞ぐ。足を擧げ踏て。溺れ苦みる時の狀を學びて。淖の足ふ著るときて。足占をあし。膝ふ至れる時て足戕擧げ。股ふ至れる時は走巳廻り。腰ふ至る法と知は腰を捫巳。腋ふ至き法と知て。手戕胸ふおき。頸ふ至れる時て手を擧げ。掌を飄しあ巳し狀を爲と爲ぞ初あ巳ゝ法。猿樂の伎て。秦川勝ふ始まると云說も聞もれど。既ふ神代ふ有しものをや。さて廢帝天平宝字七年正月の処ふ。作唐吐羅林邑東圍隼人等樂奏内敎坊踏歌と云ことあるて。火須勢理命の舞給へる狀を傳へさる樂ふや。其て此命ハ隼人の祖あきぢあ巳。此を猿舞とて言ざれども。俳優と云ると。其舞ゝ法狀とふを巳て。猿樂ゝ態あるふとは知られあぬ。然れど和邪衰伎て。和邪衰加斯あるべきと疑あくあむ。源平盛衰記ふ。猿樂と申むをゝし知事をいひあらて。人を笑はゝし侍るぞかしと有ふも思ひ合ゝべし。まと中世ふ。猿樂と名ふ負る舞の狀を考るふ。宇治拾遺物語ふ。堀川院の御時。内侍所ゝ御神樂ゝ夜。職事家綱を召て。今宵ゝ於らしゝらむ。申樂ゝ於ゝらう奉れと仰事ゝ承りて。第ゝ行綱を招きゝ。せて。仰事ゝさむら子。家綱ゞ思ふやうゝ巳。庭火ゝろく燒と法ふ。袴あゝく引上て。細脛を出して。云ゝゝ態して入らむと思ふゝいのふと云子ば。行綱さ女有ふむ。然有れど。おゝやけの御前ふてゝ。ぞむあくやと云ゝれぢ。家綱むべあ巳とう於ゝく殿上ゝて。何事をやせむ。ぞらむと待せ給ふ。家綱出て。ざせる事ゝきや

うゐて入りゐて。まと濟て。行綱召ひといへば。まおとゐ寒げ成る氣色をして。膝を股までゐ死上て。細脛を出しわあゝき。寒げある聲して。ゑて〳〵ゐ夜のふけて。さて。さて。ゐ寒死よ。ぬて。ちふぬぐり成。あて。ちふ炙らむと云て。庭火を十二三度ばゐて。廻て。走りて入りゐて。上中下おゐのとゝをみゐて。家綱はゐられとる也。憎ゐまぎも。兄弟此中。あゐふべくも非ぎとて。有しゐはらざて。けて。と見え。十訓抄ゐ。堀川院の御時。おとゝひよて。家綱行綱ぎ、いふ陪従ありゐて。無双の猿楽どもありと云る也。この兄弟ゐおとあり。はと猿樂記ぎ云物ゐ。種〳〵成ゐしげある依舞の名を舉て。都猿樂之態。嗚呼之詞ゐど有まバ。都て猿女がはし死態を爲て。人を笑はぎる を專と爲と依物ゐて。古此樂ぞ。此段の遊此狀ゐゐ形ひて。古の宮風ゐ有るばく所思と依。おれまを田舍わしさらひ為ゐるゐど。タツチク舞ザコスキ舞。イボヽレ舞ゐど云舞を見とることあり。其狀いとちまとる物ゐて。正ゐ猿楽記ゐ謂ゐる。侏儒舞。蝦蟆舞。蟷螂舞の傳れるゐらむと思ひ合されと。斯て其舞の狀も。舞ふゐまを。傍ある人どもの。諸芦ゐ謠ひもやして。誰し此人ゐも。舞の外依べき狀ゐる也。古の宮風此狀此想ひ知られて。甚感とく所思とり。但し囮〳〵處〳〵ゐ依て唱哥のふし也異ゐるものゐ。其はと自然の風俗ゐまぎど。互ひゐみやびてぞ聞も免る。然まぎど古此神樂ゐ舞ける舞也。大〳〵と咲し死態のみゐ。此れむを。漢風の樂を移し用ふる世とゐて。彼調ゐ而ゐる舞遊を。神樂と稱ひ。咲ゐ死狀ゐるをど。別て猿樂といひて。貶し卑むる事とは

あれりしかれども。然きども。堀川院天皇は御世のとまで
も。猶内侍所の御神樂ゐ。申樂を仕ゑ奉らせ給へるハ。然
はゞゐ。古へは宮風を存せるあり。村上天皇の大御言ゐ。諸
神を敬ひ。万民を安安ゐ。申樂ゐ過さるは無し。と詔
ゑるなし。幹林葫蘆集と云物ゐ見えと。實ゐ宜ある大御
言ゐぞ有ゝ依。葫蘆集は明應■年ゐ宜竹と云ゝる僧の
記せる書ゐて。鎌倉の五山は僧等は詩文
を集さる物あり。ちてまと。猿樂を散樂とも云ゐ扨きて。
同天皇の辨散樂御製ゐ。冝学峽猿之奇態莫泥水鳥之陸
歩と詔へるも。猿樂は。樂をゐしき態を專として漢風の嚴
ある調ゐどゐは。泥むまじ。紀由を示し給へるゐまぢ。矩
則とはゝべし。殊ゑ猿樂を散樂とも云ことは。漢籍ゐ散樂。
野人為樂之善者。非部位正直也。とゐるを取まるゐれバ
更ゐり。但し猿樂と云は。散樂の字音を取て。名ゐけさゆ。
と云說も聞ゆれども。そハ非言ゐり。江次第標注ゐ散樂。

猿樂也。とゐ
ゐと云ゆ。
ちて古へゐ。猿樂と云ゐは。何狀ゐまれ。可笑く
戲さる態して。神をいさ免。人を笑はゝる事を言ゐしゐ。
足利氏は御政奏されし比をゐ。猿樂能といふ謠物のい
で。紀て。此を專と持はやゝ世とゐゆしゐ。古へは猿樂は
狀を見ぢき物は。能舞の相狂言と云物ゐぞ存れ依。能と
こと。■天皇紀■年■月の処ゐ。新伎散樂競尽其能と
見え。西宮記ゐ。相摸の処ゐ。相摸了能優一番と見えとれ
ども。今在能舞の古とゐ非。古へ風の猿樂をいへるゐて。
後ゐは猿樂はみゐらゞ弘く雜戲は態を云ゐと聞
えて。文安元年は田樂能記と云ふ物ゐハ。田樂をも能と
云ゆ。後世ゐ能といふハ。此語を取て名ゐけさゆと見も。
さてその謠まさ舞の狀を見るゐ。多くは死人の霊は出
て。世を恨みさる事。或は寂滅為樂ゐどの仏語は。忌はし
き語どもゐて。粟田口猿樂記ゆ。讃仏乘は因ゐゐと云る
如くゐまぢ。仏を中子といひ。僧を髪長といひ。墓を土く

まとやうよ言直にべき沙庭に奏むことを更まもいを
安言霊神の幸ひをおひ祈む人のもて囃さむことハ甚
ふさハしからぬ
こゝちぞする。故神樂歌古本に見えとる。神樂歌次第
と其裏書に記せる。御前作法次第とを合せて考へるに。ま
ず掃部寮座遠儲計次内藏寮饗遠儲久瀧口乃陣戸与利物
音遠發氏御前ゑ參琉次各本末乃座尓著久次公卿坏遠
執氏各座尓著伎兩三度了琉先人乃長庭火乃前尓出來
氏云鳴高〳〵二度次云布〳〵留〳〵万〳〵不〳〵二度次云今
夜乃夜乃御神態乃人乃長左乃近支衛乃府乃將監某男
山乃總撿校頻氏懸多利天乃下千壽万歳可御座支物聞支
次云主殿寮〳〳〳〳二度主殿寮唯稱須仰云御火白久獻
礼。又唯稱須次云男共令立氏各乃戈可試支體申多利則自
加良唯稱須次云掃部寮〳〳〳〳二度寮人唯稱須仰云膝突
給倍又寮人唯稱須次云御笛可仕支男召須笛吹參候比
膝突志氏庭火乃笛遠吹了留人長仰云本乃方尓候倍退出
氏本乃方乃座尓著久次云篳篥可仕支男召須同久參候
比膝突志氏庭火乃篳篥吹了留仰云末乃方尓候倍退出氏
末乃方乃座尓著久次云御琴可仕支男召須琴彈參候比
膝突志氏琴仕了留仰云本乃方乃座尓候倍退出氏本乃方
乃座尓著久件三人人長乃命尓隨氏兩方乃座尓著了氏
引琴乃間尓人長仰云物聲與利合倍笛篳篥琴與里安波

世利多次云御歌可仕支男召須歌人參候比膝突志氏笏遠腰
尓差乃間尓笛篳篥吹了氏御琴尚不止獨搔久間尓兩手
遠合氏拍子止爲氏出音須其詞云美山仁波安良連布留
良志止也末奈留庭火哥音留乃間尓人長仰云本乃方尓候
倍立膝突氏著キ座了奴次末乃歌遠召須同前奈利仰云末乃
方尓候倍次人長申テ云男共令立氏各乃戈試了奴今波御
神態可キ仕ル乃狀申多利則自良唯稱了氏歸座氏著了留御琴
尚毛不止懸多利次本末乃音頭乃人各笏拍子遠取利御神
事遠始年」とのゐて次ふ取物九種榊幣杖篠弓劔鉾杓葛
但不用ヒ葛各雄拍子九雌拍子十とのゐ此採物ふ各〻歌あり

て本末の歌人是を謠ひ琴笛に曲ふ合にを採物歌を謠
ふとも云ふゐ榊歌ハ本賢木葉の香をかぐはしみと免
來きバ八十氏人ぞ圓居せゆゐ依賢木のことも既よい尋ひき〻と免來きば〻に氏人
來れむおり八十氏人とも神ふ仕奉るもろ〻に氏人
を云ふ圓居とハ字の如くよて麻止も麻呂と同言ふる
べく思れとり然きバ此も宮人とちの其処よとり集
ゐる狀を云るおゆ此哥は拾遺集に神楽哥ふも載られ
とり さて因よ按よ纏も一ッよまとひとることよて同言
の轉れるふ依べく的も形の圓きとり云る名ふるべし
末神ゲ矩のみむろ山の賢木葉は神に御前ふ茂ゐとの
比ふれゐゐ此哥六帖よ貫之かぐ冠とのり縣居大人云みむろとも神のゐらゝを云さて神垣も其社を
ひろくさにふり されどかく重云へる例もおし神おひ
のと有しを謠ふもの唱誤ゐしふ依べし六帖よ行が
上よ又もゆけふまも神ゲきやみむろの山とのるも誤ふ
り神ゐびの御むろも飛鳥の雷岳に坐ゐこゆ外ゐ若くハ他

の社にて謠ふとき、神が祀と替しふや、此哥も、古今集に採物の哥にも載られさり。はと或説、榊、歌ふ。本。賢本葉ふやふと巳ちぢ〳〵誰か世ふり。神に御室をい

はひ初れむ。を、字常の本にむと。や所巳、御神樂式、本にハ尓と所るを、今ハ古本に依れり。取ちぢ〳〵の巳、上にそ牙云こと例多く、上ふ注るべ如し。ちぢ〳〵も上に云りき。垂、字の義あり。末。霜八度お

れぞもかまぬ賢木葉に。立榮やぢき神のき祢ろも。常の本に。

おれどかれせぬと所り。今ハ古本の一本、まと御神樂式、本にも。霜八度も、霜にいや度もおけ

ども、ぢを、ぢり。縣居大人、説に、巫女のことにて、祢ぎめと云を、祢ぎを、ぢ、神のき祢とも、さて賢木の栄やる

祢ぎを、ぢ、めを祢ぎを通はし云と聞も。

こととにせて、巫女をいむふれりと所り。按ふにき祢の

説信ぐさし。此も多く木と云こととにて、祢も添と詞ふ

り。其も岩根木根、まと屋を屋根ぢ云類ふるべし。猶き祢

と詠る例も、六帖一に、かぐらを、貫之、哥に、足引の山の賢

木のぢきハふる。陰ふ栄やる神のき祢ろも、榊葉にとき

むにしあれバ外ぐけくに。命ともてる神のき祢ろも。此

等も同じ。然るを素性法師の哥ふ、神祭を、神まぢる卯月

に咲る卯花を、白くもき祢ぐちらげとるろふと有るき

祢も、巫女の類として詠るふきも、後の誤れり。猶所るべ

し。○或説、哥は、常の本にも、前の哥に並べて、大字ふ書と

まど、古本ふも、裏書云、或本榊、哥と記して、一字さげ

て、小字に書り。これ正し。下の或説、哥も此ふ同じ。幣、哥

は。本。みてぐ屋はにぐふもあらば天にまに。豐遠加比女

乃神のみてむら。神、字常、本にハ宮と所り。今も古本の一

本にとれり。さて哥の意も、上に引て注

所。末。みてぐらふれらまし物を吾ぢ神に。御手ふとらま

てふぢさはましを。ふづさはましを、一本にふづさはる

ぶべくと所り。御神樂式、本にふづさも

ともに、拾遺集の神楽哥にも入まり。さて此哥の意も既

に注。杖、歌も。本。此杖もいぢふの杖ぞ天ふまに。豐遠加比

女の神に祢ぢふ所。神、字常に本にも、宮と所り。今も古本

ふ依れり。さて此哥に意も上に引て

注へり。末。逢坂をくさ越來れば山人の千ぢせを祈ひとてきれば杖あり。縣居大人云山人は仙人は意あり。万葉に仙人を扇にあそび山に住人まと山人の我り得たゑし山づとぞあまきとあるも仙人と聞も此哥拾遺集にも有り。と云きとり。さて上句古本にハ王礼仁久礼多留也万川惠曾古礼とあまど今は御神楽式本まと常本にかく有に依れり。まと或説杖歌ハ。本。足曳の山をちかしみ物ふ附る。さゝ木の枝を杖て故きぬる。一首の意は越行く山路のさかしさに神まいに物ふを付とる賢木を杖ふつきぬるとあり。扨ぬきを本どもにきゐ。末。ぢ神の御山の杖ぢ山ある歳今は一本ふ依れり。人の千ぢせを祈ひきまるみ杖ぞ。御山は御室と云ふ同く神のまに所を云ふるべしさて哥は意は皇神の御室に奉る御杖とて山人の殊ふ千歳を齋ひ祈てきれる御杖ぞなり。篠歌は本。おは篠ハいぬ故おは篠ぞと祈りらゞ。腰ふさゞきは鞆岡は篠。縣居大人説におは篠ぞ。鞆岡の篠ふ御守をにきむ常に矢をもて弓鞆は弓射はとき左手ふ付るものあれば常ふ腰にぬけて居るべし故おしふさゞきると云るあらむ古と祈りと云は。さはゝふれむ藤原奈良の朝に云は。此は大宮人は御門の御階の下を守り。從駕の時ふどれさまあり。と有り。契冲云鞆岡は和名抄に山城国乙訓郡鞆岡度毛乎賀とあり。枕草子ふをゝと云処ゝとも。篠のおひとるゝをゝしきありぞハ。此哥に云り。鞆は弓射るときの具ふれむ。舍人等ゞ常ふ腰ふ帯くる故に帯くゝけと云ぬ。さて此哥ゝ依ときは神楽ふ採れる篠は鞆岡のを用とりと聞も三句以下古本にはとをゝひめは神のこ篠ぞとあり。ちゝわけぢ袖おそやまぬと祈河は。石はふむぞもいざ川原をゆ。縣居大人説に句の言はみを篠の哥ふ取とは祈川は上野国にある川あり。万葉にも見もとあり。哥意は篠を分行ゝぢ袖ゞ破きむびるわどに石をふむはくるしれまど川原をゆ行むとあゆ。是ふ依きぢ古利根川の辺は篠おわき由を。

都より云れらはせしあるべし。さて此哥新勅撰集神楽哥よも載られとり。はと或説篠歌ふ。本。

笹の葉ふ雪降れも依冬れ夜ふ。豊のあそびをしるゞゐ

れしち。縣居大人云。大やけより。終夜燈をともして。大御遊しと云給ふを。豊のあゝりして。神遊ぶる心あり。然きど。豊れ遊と云も。豊のあゝりと云り。此て豊のあそびと云る古言も聞えゞ。今の京あどふいひ初し畧言とおゞも。さて此もさ〳〵の葉と云る一言を取れるのみあり。さて結句れち。字常本てハきとあり。今も古本よをきゆ。末。

み祢垣の神れ御代をゆ篠の葉を。ゐぶさふ。とゆを遊び

ゐ飛し。契冲説より。万葉より。これゞ紀の久しき世をり。と多く詠ゞ。おれもまと其意あり。はと古れ神の御世をりゐひゐらし。と詠るも。久しきおとを。神の御世と云り。ゐぶさも腕。字をを矢ゞ。後撰集より。遍照をりつきむとぶさよけゞるゐてゐゞら。こをの仏ふ花とてまれ依とも詠ゞ。又篠を。手草ふとゐと云ゞ。若くも書誤へとるゝと云り。加茂翁の解より。腕をいふ説をゝあもびと。て。手草の誤とせられ。師もゐぐさをゐぶさと謠ひ誤き依あらむと云きれど。予ハ契冲説ふ心ひゝる。さて遊も。出あもち神楽あり。弓歌も。本。弓といゞ。

弓ゞ。おれ紀ものを梓弓。よもみ槻弓。おれおそゐるら

ゝ。加茂翁云。梓弓。檀弓。槻弓。その木よをゞて。種〻のゞゝ。ちゐれど。ゐ〳〵より弓と云ときも。何れくさもゞゝ聞。白依と云よゞて。此おあゞも。種といふ意れゞ。と云れき。さて此哥ふをるよ。神ふ奉る御弓は。かく種〻の木りて造るとおゞえとり。此哥。新勅撰集の採物り載られとるよも。終の七字を。一おあもあし。と直されとり。何依意とも聞え難し。末。陸奥のあゐちれ眞弓我ひゝば。やうやくよゞ

おれびれびふ。安達も陸奥郡の名あり。其をり出る弓を云あるべし。万葉十四より。みちのくのあゞ〳〵ら眞弓。と云るも此と同じゝるべし。同集より。信濃のま弓と云るおゞも有り。さて檀木も。古多く。おを以て弓を造れゞし故より。眞弓の木と云ゞし。終より此木の名とはあを依れらむ。さて弓をひけば。本末の我方ゞ寄る物白ゐより。ゞ來とも云るあり。扨やうやくを。古本も常本も。やう〳〵と有り。古今集より。採物の哥より入

て、末さ弓を巳おせあり。加茂大人、説よ、やう〳〵は常言あり、とはや〳〵を巳と云るを誤れるおらむ、万葉よもや〳〵あど詠て、然云ふぞ雅言あ依と所巳、今も御神楽式の本よ従れり。

まと或説、弓、歌ふ本。さ数をらぐもあせ此眞弓おく山ふ。みゝ巳にらし

も弓は笞見也。加茂翁、説よ、弓矢をもて、物を得依と云古言をりあて、弓矢もて猟せる人を、さち人と云をもやくよゆ轉して、さ数人、さ数をとも云ゆ、もさせも、あゞ持をは法て云のみ、従者あどふ持にると云よ非爻とあり、こかゆも、契冲云、常の狩れり、万葉よ、こ袖もて床打もらひと詠るも、吾袖を云ゆ、今、世もみゝ巳と云も、上よのみ云て、下ふはゝをは無あ巳と云り、さて常本よハ、さ数てらとあるを、今も古本、一本よ、佐川乎と所るふ従れり、さ数てと有る本は、乎を手と誤れるあるべし、契冲も、さつてやあ依本を採て、さ数てもさつち〳〵数巳、ち〳〵を〳〵と云も、音の通へむあり、薩摩、国も、幸彦さちの住さ万ふ国あれバ、名付とるよて知べしと云巳。

依と本。をも山此ま母巳ふ嘗のむ梓弓。神の嘗からよ今

為数るか形。をも山も加茂翁、解よ、或人、説として、四方八方、のゝと云る由ミも、四方山ぞいふ言も、俗言をきて聞ゆれむ、此も実ふ、四方八方のゝ数まる言あるべし、栄花物語、花山巻よ、ことしも、世此中ふ、もゞさと云ものいできて、をもやまの人、上下やミ此〳〵あ依よ云〳〵とあるを、一古本よ、を母やもとあ巳、されど此のをも山も、諸本ミ此かくあり、拾遺集の神楽哥よ載られさ依よ母、をも山の人此さのらよにる弓を、神の御前ふゝふあよてま数依、とあるまバ、もとをりをも山ありしゝ、さて此哥よ依るよ、古も世、中、人、誰も〳〵弓も宝とし、守とはさのみさ依ありゝ巳、ま母りを、古本の一本、まさ御神楽式、本ハ、まありと有り、同じあと巳。

末。梓弓も依來るおぞふ皇神の。豊此あそびふ所むとぞ思ふ。梓弓。

あ〳〵よて、も春よゝけさ依発辞あるを、此哥神祇の哥よて、梓弓と云言ざまあるもあよ、弓の哥とも為数るあ依し、可。

劔哥は。本。白ゝ祢此目貫の太刀をさぎはきて。あらの都を祢るも為の子ぞ。目貫下よ、劔の事を云る処よ、目貫之穴

二とあり。今云ふ目釘穴ありと云ひ、孫るも足ふこを齊
たく、靜まひとは意あり。加茂翁の言れとるゲ如し。さ
て常本ふも、孫るや、とあるを、今も古本まに從
れり。まと一古本まも孫ひひとは意ゲ有。末。石上古屋
をゆ古の太刀もゲ。くみの緒ゆで〳〵宮路かをはむ。加茂
翁、說まに布留、神社あどまと在し人をき太刀も孫ひとは有
ゲ。まと此神宮まも、古、宝劔を多く納、給ひしゲ。其まに准
へて、を孫太刀はく人有しゲ。万葉十六まに。虎まに乘ひ古屋
を越て青淵まに。鮫龍とり來む劔刀もゲ。この古屋も、地名
と見も。今も是あり。石上も冠辞あるべし。然らバまの古
屋も、何処とも知ゲさし。万葉、哥も、劔刀もゲも、古屋まを
し有こゆ〳〵見も。るを、此の哥まをれむ、古へゲの地ゲ。よ
孫太刀もとるをとと有しゲ。くみの緒も、太刀もをとり
のくゆまとあとは云とあり。さて
此、二首も、拾遺集神楽哥まに入れり。 まと或說、劔、歌。本。い
はひ來し神もまゆ孫ひ明日をひも。くみの緒ゆで〳〵石の
そべ太刀も孫。石のそべを本どもゆ石のそびとあるを、今も
古本まに依きひ、哥の意も、神の祭は安ぎゆ

れむ。隙石のきとり。太刀もきて石のそべと、誘ひとる意と聞
も。まと女神の御前を拜むまも。太刀もくまじき故実の
有。まをりて按ふまに。大御神ハ女神まませむ。古、その御前
ゆ候ふとしても。太刀もゲ。ひむゲ。其御祭も安ぎゆ
れむ。是をひ太刀をハきて石そ淡と云、るまや。其もとま
き。古、よゆ太刀ゆ。やどとあき物まゆとりしゆと。此哥まに
ても知
らる。 末。於ゆきふ皇神さちをいもひおし。心は今ぞ
あれしかひひ。加茂翁、解まに。奥つきハ奥櫛まて。人を〳〵
くいもひ奉る御室をも云しあり。をも石り。哥の意もおき
ゆきまに。皇神さちゆいはひ竟ゆきむ。今も心れあのし孫
と歡べるあり。但し此哥劔まも緑あし。然るを梁塵抄まに。
皇神さちとあるさちを。太刀の緑まに解れしもいかゞ石の
ら。鉾、歌も。本。おの鉾もいゆおれ鉾ぞ天ふまに。豐をゆ姫
の宮れあほおぞ。みかこぞ。諸本まほおありと石るを。今
も古本ふもれり。さて哥れ意も前まに注
ひ。○おゆ〳〵まに出さるみてぐらハ云く。此杖も云く。此鉾ハ
云くあどの哥三首。これら此時。豐宇気、大神を祭りとる

證とすべし。おき郎大御神の。豊宇気大神を祭ひ給へる。大御心を。心としての祭あり。まと大殿祭の文をく見ゆ。

末。を妥山の人比まほひふ安ゆ鉾を。神比みまヲ了い

はひ為てと。加茂翁解ふ前の弓比哥とひとしく。其中ふ人の守と云ときた。をも山た。多ゞを。も

岩云むゞ如し。と言きしたさる説了て。此哥ふ依て思ふ

ふ安。をも山を云詞た。四方八方と云言の。訛りと知られ

と。ひて諸本ふ。まホひをまもり。いたひとてと。

ゆをいたひ扨る哉とあるを。今た古本ふ依きり。

本。大原やせゞ為の水をひさおもて。鳥ハ鳴とも遊びて

れまむ。梁塵抄ふ。せゞ為た清和井とゝけひ。山城。囲大原。

清和院を。枕。艸子ふ。せゞ為と云ゆ。解きしを。加茂翁解ふ。

云はいゝふぞや。せゞ為た堰之井おひ。大原や堰の清水と

をと。伊勢物語。古本ふも。ゆるこきれめ。右。哥六帖了ハ。手

ふくゝてとゆるを。杓の哥とせむとて。杓もてと替とる

おひとあり。六帖ふ依るときた。せゞ為の水を手ふくみ

扨〳〵。鳥た鳴とも。京み遊むむと云るおゆを。此た其を直

して。杓の掬物。哥とおゆ扨ふれむ。赤の意たおく。あゞ鳥

た鳴とも遊むむを云るふて。大原やせゞ為れ水をと云

まで。序を見てあるべきふや。さて古本ふた。大原やせゞ

為のおゝづひざとして。鳥たあくとも安曽不世遠久女。

とあきど聞え難し。又常。本了ハ。遊びてむ

ゝむとあるを。今た御神楽式。本ふ従れひ。

末。ひゞ門の板

井のおみ於里遠ゝ。人しくま祢む水さびふれひ。板井た。今井似

開。説ふ。板を並て井とせるゆりとあり。さて常。本ふた。水

草為ふりゝりとあるを。今た古本ふ依きり。水佐比とハ。水

渋の浮くこをゆりと。加茂翁の言れとるゞ如し。古今集

掬物。哥了た。水草おひふれめとゆる。是も悪ゝらびまと

六帖ふ。初句を我やどのと

有て。家持卿た哥をせり。

字は。ゝ。ゆ折ゝ了了し。て。万止為世利計留。万止為世利計留。

美川佐比仁計利。美川佐比仁久利。と謠ふおとあひ。謠竟

て。於介阿知女。於介〳〵と囃ひおどくさぐ

さ作法のゆるを。其た。その書ふ就て見べし。さて此了右

此歌ども殘舉て。少々其意をも解れるも。此段は備と已し物を思ひ合せて。古意を辨ふべき歌も多られぬかめ。その中は。弓。杖。杓も。此段は見えざることもあり。さるを〳〵ふ傳の洩とるゝぞ有べき。ちてかく杓歌までを謠ひ竟て。次り片折と云を謠ふことを。已。片折てふ言も。加茂翁解は。求子哥の末は。加太於呂志。加太於呂志とゐしり。古事記り。片下と云こともあり。さきぢ此の折もおろしの意はて。下の借字ゐを思へど。かゐ違ゐぢ。板井やの言此みを。重祢うさふを云。を言れしハ。梁塵抄ふ。片折と云も。哥曲此節此名あり。杓の哥はとりて。せゞゐやせゞゐ。板井やいさゐると。二句を重祢で謠ふを云り。とあるはも符へり。其歌も。本方ふては。大原やせゞゐやせゞゐ此水を杓もて。鳥は鳴くとも。遊びてくまむの歌を謠ひ。末方ふて。我門乃板井や。板井の清水さゝ〳〵ゐみ。人しくま祢ぢ水さびふゝ已此歌を謠ひ。次ふ諸舉と云を謠ふ。其歌も。本方はて。せゞゐやせゞゐの水を杓もて。鳥は鳴と安あそびてくはむと。謠ひ。末方ふて。板井やいさゐ板井の清水里とゐみ。人しくま祢バ。水さびはゝ已。の歌を謠ふことゐ已。諸舉てふことも。梁塵抄ふ。此も哥此節ふり。初句を畧きて。二句を三かさ祢て謠ふを云り。為を へバ。陽関三疊の曲と云ゞ如く。王維ゞ詩を。行人を送るとき。詩此句を。三度かさ祢て。謠ふことの有ふ准ふ。次ふ韓神の歌と云を謠ふ其も本方ふて。三嶋も肩ふ取挂け。已れ韓神此からを戔せむやゝらを已。三島も多のこと。梁塵秘抄ふ。伊豆。囲三島と云所をり出る木綿ふり。を見え。加茂翁も。此説はをられさまど。木綿も。安藝。囲の を用ふる由。式はも令ふも。記されさるを何は祢む。ふゐ疑はし。肩はとり挂も。祝詞。文は。弱肩尓太襁取懸

氏と見え允恭天皇紀に木棉襷の事見えたるなどに依るに手次にかくるをしなり加茂翁解に木綿を頭より肩まで垂るゝ故に肩に取かけと云るなり頭にかくる事万葉に見ゆと云れしかど然れ有まじくおそからをきは枯荻に韓招と空招の意をかねたりとおぼゆ其れまた躰源抄にからをきは枯たる荻を云かや清暑堂御神楽の試楽犾柄家にて行はるゝとき人長枯たる荻の枝を持ことなり是祕藏事なりと見え源氏物語若菜下にもとめことハおるなるに若やかなる上達部ハ肩ぬぎて云く見るかひおなかるばがさどもにいと白く枯たる荻を高やかにさしかざしてまゝひもかへり舞ていりぬるもいとおもしろくかゝばぞありけると有を合せて思ふにからをきは枯荻にて其を持つあやも有しことゝ論ひなしさてなか荻を持てからをきせむやと云る意は大御神の石屋戸にさし隠り坐るを招奉りしを本にて空招ハせまじ招出し奉らむとの意にて空招と韓招語の同じき故に韓神のとも云るなるべし其も韓神とも御神楽式に韓神之事ハ素盞鳥等予也とあるハ正き傳にて五十猛神のことなるを此も韓を招きよせたる神なる故に韓神の如く韓招せむやと云て空招に云か

けさるものなるべし然れど韓神章に詞は此かやうなる事によるも非ざるをまゝ其詞を取て哥の名とさへしたるならむ御神楽式に加良於幾座置也とあるは誤なるべし。なほ韓神の事は第六十七段五十猛神の処に云ふを合せ考ふべし。

と謡ひ。末方にて八ひらでを手にとり持てり。れ韓神のからをきせむやの文字起。加茂翁解に八ひらでゝおほくの平盤なり。柏葉を集て竹串を器形に作りて神の御食物をもるなり。大嘗祭式に葉盤比良氏似笠形とある是なりとあり。八平手の意ととるは非なり。手にとり持てとあるを思ふべし。

と謡ふことなり。さて上件取物歌了て次に人長さし擬ひ各々に酒を給ひ。其事了りて。倭舞仕奉る人を召て舞し終。是より前張仕奉ることなり。前張に大前帳小前帳と云あり梁塵祕抄によるに大前帳に哥七首あり宮人木綿志天難波潟前張階香取井奈野これなり小前張に哥九首あり薦枕開野砥等篠波殖槻総角大宮湊田蕃これなりさ

いざ卍と云名の義は初萩おめ。さいは前おり。初と云意おめ。はりは萩おり。万葉よは卍。原と云へるも萩原おり。さて前張よは。さいざ卍小衣はらむ雨ふれど。うつろひぐさしやうくそめてざと云一曲の名を。凡てよ遍して名付さるふ寺。大前帳七首の中は前張は。本曲よてあるを。其調子りて。十六首おぐらうあふよ取りて。又律呂おどのちぐひ免ゐるよをりて。大前張。小前張とはいひ替さるよや。おゐ郢曲の人ふ問べしと。是も梁塵秘抄の説おり。

おゐ次く謠ふ歌おゐく。種くは式あふ事おるを。此ふは少う。其次第を記はのみおゐ。おゐとく其書どもを読み。其人ふ就て問ふし。さて古本は目録は處ふ。蛍をめ以下を。雑歌と云ふ由見えて。終ふ神舉と云歌は名ゐの卍。おゐ此等のこを。委くむとは。神楽哥は注解よ云

○門人。岩崎長世。間秀矩。馬嶋穀生ら云ふ。古史傳の。十巻ゐのまは一巻ふあふふまを。板よ彫らはと勞はは卍。志た。秀矩穀生らもはれじ。美濃国恵那郡中津川の里人。高木定章。勝野正方二人よおそ。

1.95
34
111